

關取千兩幟

座本竹田文吉

本番別れの跡の振狐、くこんくわいの涙なるらん。正當國は此邊に住居致す古狐でござる。爰にある者の候が。何時の頃よりか狐を釣初め。面白いと思つてか。釣る程に。我等が眷屬を釣取つて。某をも覘へども。そつとも油斷致さぬ所で。聊爾に餌を食みにいでう様もござらぬ。こゝに彼が伯父坊主に。白藏主と申すがござる。此白藏主の申さるゝ事は。天逆様なる事をも。かの者が承引致す所で。今日は白藏主に化け。意見を致し釣止らせうと思つて。化けたかと存す。先づ彼の獵師の許へ行かばやと思ひ候。住み馴れし我が古穴を立出でて。く。足に任せて行く程に。獵師の許に着きに

けり。間念ぐ間。獵師の許に着いてござる。誠に彼の者が。犬を餌はぬが一つの取得でござる。犬を好いて飼ふならば。中々我等如きの。寄り付く事も叶ふまいくわい。犬の聲。遠鳴であつたもの。えい肝をつぶした。先づ案内をこふ。物もろ。案内もう。表に物もうとある。案内は誰そどなたでござる。エイ白藏主様。ヲに通りはなされいで。夜中に何と思つてお出なされました。只今参つたは別の事でもない。ちと其方に意見のしたい事あつて参つた。御意見とござるならいか様の事なりとも承りませう。先づ奥へお通りなされませい。イヤ。思ふ仔細があ

る所で。奥へは通るまい是にて申さう。聞けばそなたは狐を釣るとの。イ、ヤ左様の事は存じませぬ。な隠さしませ。寺へ来る人毎に。アレあの甥の殿こそ狐を釣れ。人にさへ意見をいふ者が。あれが目にかゝらぬかと。人ごとに云はせらるゝ。よもや偽りではおりやるまい。御存じの上は隠しませう様はござらぬ。此間狐を一つ釣りましたが。面白う存じて。釣る程に。七八疋も釣つたでござらう。ム、シテ狐を釣つて何におしやる。皮は引つばいで引敷に致します。身は料理して食べます。骨は膏藥煉に賣ります。ム、聞いてさへ身が顫はるゝ。あの狐と云ふ者は。執心の恐しい物ぢや。此後はふつりと止らしませ。何が扱此方の御意見でござる程に。此後はふつりと釣止りますでござらう。何ぢや止らう。それなら爰に。狐の執心の恐しい物

語がある。語つて聞かさうか。ア逆も釣止るまいならいらぬ物かい。イヤふつつり止りませうお聞かしなされませい。それなら其床儿をおくりや。畏りました。お床几。此物語を聞いて後。釣ふつつりとお止りやれや。畏りました。抑狐は神にてぞおはします。天竺にてはやしほの宮。唐土にてはきさらぎの宮。我が朝にては。稻荷五社の大明神と申すも。皆これ狐なり。ハア。まつた鳥羽の院の御時。玉藻前と申して。容顔美麗の美しき上童のありしが。彼を玉藻前と申す仔細は。四角八方より其姿を見るに。裏表なき美しき女なり。惣じて玉には裏表なき物なればとて。玉藻前とぞ召される。ハア。ある時清涼殿にて御歌合せありし時。あいその如くなる大風吹來り。禁中の灯火一燈も残らず消えぬ。其時玉藻前が身より光を出し。玉殿は申すに及ばず。

御庭の眞砂の敷造隈なく見え候間。帝この光に當り給ふと。忽ち御惱とならせ給ふ。貴僧高僧を請じ申され。色々御祈禱候へども更に其驗なし。爰に安倍の泰成と申す博士を召され。占せて御覽すれば。泰成參り懇ろに考へ申す様。これは偏に玉藻前が所爲なり。根本此女は狐なり。天竺にては班足太子の塚の神。大唐にては幽王の後妻似となつて七帝逆取殺し。今又日本の帝王を取奉らんと玉體に近付く。かゝる執心の恐しき物なれば。急ぎ調伏有つて然るべしと。頓て咒壇を築いて護壇を飜り。薬師の法を行ひ給へば。大内にもたまり兼ね。下野國。那須野の原に落ちて行く。國內通化の物なれば。疎かにしては叶はじと。三浦之介上總之介に仰付けらる。兩介承つて。下野國那須野の原に下着して。百日の犬追物とぞ聞えける。百日の犬滿じければ。大きなる

三ツ尾の古狐顯はれ出づるを。一の矢は三浦之介。二の矢は上總之介。ひやう。どつきと射る。得たりやおうと飛んで下り。劍を以て彼を害し。帝へ此由奏聞申しければ。君の御惱も忽ち御平癒あり。國も治まり太平の御代となる。猶も其執心大石となつて。人を取る事數しらず。地を走る獸。空を翔る翅まで地に落つ。かゝる殺生を致す石なればとて。殺生石とは名付けたり。爰に玄翁といへる僧。彼の石に向つて唱す。汝元來殺生石とうせきれいしやう。何れの所よりか來り。何れの所にか去ると。拂子を取つて三つ打つ。打たれて此石割れしより。猶も人を取るぞかし。かゝる執心の恐しき者なれば。此後釣ふつと。お止りあれかしと思ひすよ。恐しい物語を承りました。此物語を聞いては。狐を釣らう物ではござらぬ。此後ふつつりと釣止りませう。それは嬉し

い。それなら其狐を釣る輪鼠とやらがあらうそれをお捨てやれ。お歸りなされたら捨てませう。いやといへば、其道具を見たら。釣りたい心も出う。身共が見る前どつととお捨てやれ。畏りました。是でござる。ム、穢しやく。とつととおすちやれ。捨てましてござる。何ぢや捨てた。ハア。ヲ、能うお捨てやつたなう。意見を申すにお聞きやらすば腹が立たうに。得心めされて満足致した。奥へ通り子供にも逢はうなれども。清められてから参らう。兎も角もなされませい。そなたも又些寺へお出やれ。何も馳走はなけれども。昆布に山椒良い茶を申さう。其お茶が何よりでござる。ア、お出やれとは申したれども。何も馳走は申さぬ。昆布に山椒をまいて。ハア。茶ばかり申さう。ようお出なされました。アお出やれと申したれども。何も馳走は申さぬ。

昆布に山椒茶ばかり申さう。く。茶ばかり。く。く。ワイ。ナウ嬉しやく。まんまと意見を致して良を捨てさせてござる。是から何方へ行かうとも。身どもが心の徳ぢや。此様な心面白い時は。小唄節で歸らう。狂言所に住めばこそ浮名も立てなう。往のやれ。我が古塚へ。しやなら。く。とワイ。良を捨てたかと思ふたれば。身どもが歸る道の真中に。張りすまして置きをつた。アノ善九郎は聞えぬ者ぢやナア。誠に。人間の狐をば野狐の心と申して。物疑ひをすと申すと聞いたが。彼奴は狐には劣つた奴ぢやナア。いや又どの様な事がしてあれば。若者どもが良にかゝつたしらぬ。鼠の様體を見て置き度い物ぢやが。ム、何やら小さい眞黒な物があるが。ヤイ汝め。其小さい形で。能う身共が眷族を釣取つたなア。それがよいか。これがよいか。覺

えたか。く。ム、よい匂ひかなく。良にかゝつたこそ道理なれ。上々の若鼠の油揚。これが食はずにおかれうか。飛びかゝつて一口に喰はう。喰ひたいなア。く。ア誠に。眼前若者どもがかゝつたを知りつゝ。身どもが良にかゝつてはなるまい。道を變へて歸らう。ム、よい匂ひかな。この匂ひを嗅いでは中々歸られぬ。さうぢや餅ばかりむしつて食ふに。食はれぬといふ事あらうか。飛びかゝつて一口に。食ひたいなア。く。何をいうても此。身重い形で。良にかゝつてはなるまい。よいくたつた今此化けた衣裝を脱いで来て。一口にする程に。其處をのいたら。卑怯者であらうぞえい。ぐわい。く。く。

中入り待兼ね樂屋には大阪屋の全盛。錦木太夫禿ども煽ぐ引舟押しぬぐふ。汗は流れてッ。泉派の。馬後の出端の衣裝

をちやつと。ア、おきや〜。もう狂言
所ぢやないと、禮三が胸ぐら引据ゑて。
「お前様は〜能うも〜あんな悪性な
されませう。コ、コレ何いふのぢやぞい
の。エ、新住の京がことか。さしてもな
い事を愠氣はゆるりと仕やいの。イエ
エなんのそんな事言や致しませぬ。京大
阪での色事ならまだしも。遠い近江の彦
根とやら。しかも屋敷の女中様が。お前
に逢はしてくれいとあちら座敷に待つ
て居る。私は知らぬふりで袖之丞に問は
したれば。禮三様に國で深う言交したと
あつかましい言ひ様。ナウ百合。アイア
イあの通り。お前の悪性に違ひはない。
何と覚えがござりませうがな。ム、有る
でもなし無いでもなし。彦根は親どもか
ら御用を聞く家。去年お國へ往た時に。
三島彌太夫といふ人の娘。お才といふの
につい鳥渡。其ちよつとが癖の悪いと。

「お久しうござります。何として爰へは。
ハイ私は父様に勘當受けて参じました。
お前と不圖言ひかはした。様子は知らず
彌太夫様。丹波の家中津田兩助様とやら
へ。嫁入さす約束したと。聞いてはつと
痞が上り。母様に打明けて。おナウ瀬平。
成程左様。兎角あなたはお前に添はねば
死ぬる心。と申して許嫁の兩助様へは立
たず。母様御合點で國を駈落。再び屋敷
へ歸らつしやると手打に逢ふ娘。否でも
應でもお前の奥様。お手渡し致したら拙
者は早や國へ歸りたいと。様子段々聞
く度に禮三が恟り太夫が修羅。腹立顔を
お才がながめ。お申しあなたは何方様。
イヤこれはおれが伯母貴ぢや。へエても
扱も。お若い叔母様でござんす。イヤあ
の様に見えれど。年は四十六。元服した
子が二人ある。これはしたり申し叔母御
が附添うて。フシとやかに座につけば。
「ア、これは〜お才殿。アイ禮三様。
どうでござります。肝心の所間が抜けて
らりになつた。太夫様こりやマア何事。
コレ善九郎様。おかうぢやわいなと叩く
引舟。おイヤア我折。扱は旦那が釣狐ぢ
やない。釣娘。サイナ女子を化す男狐。
おれも狐の面目ない。嘘こんくわいでご
ざりませう。エ、口合所かいな。私は愠
氣仕はせぬがマアどうせうと思召す。ハ
テどうというて往なして仕舞ふ分の事。
したがおれに逢はずば往ぬまい。ちよつ
と逢つて好い加減に欺して往なさう。善
九郎爰へ呼んで来い。コリヤ〜太夫が
事は隠すのぢやぞ。ヲツトそこらはすな
させん。どうなと勝手に走り入る。フシ
ついに來なれぬ難波渡。田舎育ちのぼつ
とりも堅いは武家の育ち柄。若黨らしい
が附添うて。フシとやかに座につけば。
「ア、これは〜お才殿。アイ禮三様。
お久しうござります。何として爰へは。
ハイ私は父様に勘當受けて参じました。
お前と不圖言ひかはした。様子は知らず
彌太夫様。丹波の家中津田兩助様とやら
へ。嫁入さす約束したと。聞いてはつと
痞が上り。母様に打明けて。おナウ瀬平。
成程左様。兎角あなたはお前に添はねば
死ぬる心。と申して許嫁の兩助様へは立
たず。母様御合點で國を駈落。再び屋敷
へ歸らつしやると手打に逢ふ娘。否でも
應でもお前の奥様。お手渡し致したら拙
者は早や國へ歸りたいと。様子段々聞
く度に禮三が恟り太夫が修羅。腹立顔を
お才がながめ。お申しあなたは何方様。
イヤこれはおれが伯母貴ぢや。へエても
扱も。お若い叔母様でござんす。イヤあ
の様に見えれど。年は四十六。元服した
子が二人ある。これはしたり申し叔母御
が附添うて。フシとやかに座につけば。
「ア、これは〜お才殿。アイ禮三様。」

事を地廻しといひかけられて錦木も不承々にアイ。ようこそ禮三を可愛がつてやりなはます。私は婆の事なれば。増す花のお前様。お樂みなはませと。

地びんとするのを鎮める禮三。綾線り廻す狂言師も。あとにフッこまりし最中へ。地禮三々々ちと逢はうと立出づるは。

藏屋敷一原九平太。禮三はちやくと。コレ瀬平殿。お才は少の間。隣りの西照庵の庭見せて来て下され。太夫もあちらへ。

イヤ錦木は爰に置き。イヤ申し今日は禮三が揚げた太夫。廓の貸借は格別。お前の慰みにはなりませぬ。構はずと往きや

く。追ひやる跡にフッむつと顔。町人と武士とが買論しても濟まぬ事。先達て錦木は親方左衛門方へ。手附金渡し置いたれば。今日明日には身請して身共が女房。なんぼ元氣張つても部屋住の禮三。楯つき立は叶はぬ事と。悪口明

けて次の間から。手代の善九郎。お侍様此方も二百兩といふ手附八へ渡した使は拙者。若旦那。言はれては立ちませぬ。エ、今日中に身受して見せたいな。ならぬ事。七百兩の金がなくては。太夫が身受はならぬわい。吹きや

飛ぶ様な身上で。何としてと。地當てこすられて若氣の禮三。スエテ無念ながらも有合せぬ。兼て始終を一問の中。金子御用に立て申さう。禮三殿と呼びかけて。出しづ。出づる其勿體。エ、前は江州の村岡團右衛門様。ヲ、御用に就いて登り申した。様子あれで承つたが。お手前こりや立つまい。只今太夫を身請めされ。今其方に有合せぬ金子。團右衛門が貸し申すと。地家來に持たせし挾箱。取出す五百兩。取し下さるか。ヲ、サ念の爲假證文。ハア。サア。太夫主は此方の物。

深き恵みの祝箱。裏黒々と裏判に。證文認め。フッ差出せば。此方の旦那は五百兩や七百兩は。する度にぶつくと吹き出る。ドリヤ太夫主の身請金。地親方へ渡しに来うかと。金を財布にひけらかし。フッ廓をさして行く跡は。地九平太はぐつともいはす。禮三は氣味よく。御覽じたか。お氣にはさへられな。算用の知れてある御知行で。太夫などは請出されぬナアお侍とフッ當て返す。折から中間かつつくばひ。敷より。急の御状と差出す。讀終り。氣の毒な事がある。ナニ禮三金子返してくりやれ。エ、たつた今お貸しなされた其金を返せとは。イヤありや殿の御用金。只今の難儀を見て。暫しの間に合せたは武士の情。今相役より金子急入用と申越したれば。延引すると身共

は切腹。背中せなかに腹。サア返してたもれさ。ちやと申して亡なげ八の方へ遣はした金。今戻せとは餘あまり御無體。イヤ身は無體は言はぬぞよ。此證文に何時なりとも返辨と云うたは偽いつはりりか。ム、こりや聞えた。借證文を反古かたむかにして。殿の金子を横取りぢやな。ア、申し、何の左様なヤア吐かすな。もう此上は藏屋敷へ引立て。相役の手前まへ垢あかをぬく。憎にくましい奴と扇で丁々九平太も。盗みひろいだ其金で。受出し自慢おごり措おきあがれと。二人が足下に蹴く飛ばばしく。サア、うせうと、ッ引ひ立て行く。詞申しく、暫くと。地聲ぢこゑをかけて立出づるは。禮三が親淨久禪門。ヤア親親父様。何時いつの間に。地いへど見向かす圍右衛門が前に手をつき。詞悴あはれが不調法。此頭に免あはれられ。何事も御了簡と。地久三に持たす千兩箱。蓋ふた押お取とつて五百兩。御返進と、ッ差置けば。詞ヲ、丁寧の仕

方。斯うなうて叶はぬ筈。淨久にも堅固で重疊。金子相違ない上は急ぎの御用。地罷り歸ると挾箱に取納め。詞そこなお侍。おさらばと。地互に黙禮目遣ひに。様子有り顔九平太も隣。ッ座敷へ立つて行く。地心掛りに、ッ窺うかがふ錦木お才も歸る小庭先。聞くとも知らず親淨久。詞ヤイ禮三。此親が年々持ぎ溜たまりめた身上みみ。金銀は親の身の膏あぶら。其膏を始末する事を知らねば。終には金銀の冥みやう加かに盡つきる。金は町人の寶物たからもの。芝居の狂言でも。三種の神器とやらいふ寶物の事ばかりで。一日座中があたふたする。其大切な寶物を。色狂いろきやうひに遣ひ果たす痴呆ちばう者。今日も町の參會に西照庵へ往いたれば。東座敷の襖ふすまに。書いてあつた落書。コレこれ見いと。地取出す襖ふすまのまくり相合傘に。詞大坂屋錦木。鶴屋の禮三。是見た時の町の衆の手前。餘あまり腹が立つて引捲まつて戻かへつた。

まだ其傍に。誰や彼や書いてあつた。ハア何とやら。ヲ、岸木屋お艶として。其傍に。相人あいには醫者いしや殿かして。慶子けいしと書いてあつたわい。コリヤ子供はかせぬ惡戯あくご。子供こどもの口の端はにまでかゝる様な事をして。鶴屋の名跡ななせが立てられうか。勘當かんたうぢや。立つて行けと。地父の腹立。身に徹たへ思はず知らず錦木も。科人は私とお才も共に轉まび出で、エ泣ないて。ッ託たくするばかりなり。地きよろ、眼まなこに善九郎。詞禮三様。只今亡なげ八へ持つて往て。今の小判を明けて見たれば。コレ此通りの戎様あまがま。こりやマアどうでござります。ヤア何ぢや。寶金たからぢや。ハテめんような。近江の屋敷で。村岡圍右衛門といふ知行取が。寶金を遣はう様はないと。地親子の不審お才が不審。詞アノ村岡圍右衛門が爰へ來たかえ。ヲイノ。エ、イ申し其圍衛門は私に狀を付けて。父様へ貰ひかけ。聞入れ

ないを意趣に持ち。闇打にせうとの工みが顯はれ。則ち私が勘當受けた其日一所に圓右衛門もお國を追放。ヤアそんなら彼奴はお拂者か。サイナ。其跡で殿様の備前長光のお刀紛失。是も大方圓右衛門が所爲。スリヤ今の金も銜られたか。汝此儘で置かうかと。地駈出す禮三が向うより。詞若旦那お待ちなされと。地名乗は高き岩川次郎吉。池田の名物。ッ角前髪。詞私は角力の寄初で。浮瀬からたつた今。聞いた所が。常體の術と違うて。根のある仕事。つい詮議はなりますまい。が差當つてお前の身の上。御隠居様聞えませぬ。天にも地にも。たつた一人のお子ぢやないか。世界に金遣ふ者がなけりや。金儲ける者もない。金銀は廻りもの。色狂ひしたとて勘當とは。餘り胸窓ござります。というたらお氣にさはらうけれど。土地の者でもないに。どうした事

か。嚴し御最眞。お前の御恩忘れぬから。大事の若旦那。此位の事で勘當とは。ちつとお前老宅かと思ひます。わしを最眞して下さる氣なら。一番此訛言は聞いて下んせ御隠居様と。地大きな形で物言の。あどない所が。ッ聞取なり。地淨久手を打ち。詞次郎よういうてたもつた。常は追従しても。かういふ場所になると。踏込んで訛言する者は手代にもない。過分な。が此勘當はどうも赦されぬ。といふ仔細は此女中。御用承る近江の屋敷の物頭。三島彌太夫殿の息女。丹波の家中津田兩助殿へ嫁入する筈の人と。結び逢うた禮三が悪縁。斯う駈落して來たれば。國へいなせば直に手討。というてお出入の屋敷の娘御。不義合點でおれが子の禮三に添はしては。御家中へ如何も顔が出されぬ。かういふ事は知らいで。息子が夜泊日泊は。新町の太夫故。いつそ身請して

やつたら。結局しまりが出来るであろ。聞いた様子が。此お山も眞實禮三を可愛がつてくれるげな。高が千兩迄の事。給銀の高い乳母置いたと思うて。身受の宛に持つて來た。隠居金の千兩。まだ五百兩残つてある。これで濟むなら金立てて。女房になと妾になと。他人の事はおりや構はねど。棺桶に片足踏込んで。究竟な悴を。久離切らねばならぬとは。思へば悪い入前と。十徳の袖顔にあて泣き倒れたる親心。禮三も不孝の悔み泣き。女郎も共に。ッありがた涙。地善九郎がけらく。笑ひ。詞結構な親旦那の御了簡。そんなら其金。錦木が身の代。たつた今親方へ私持つて参じましょ。イヤ。こりや其方は頼まぬ。この使は岩川。デモ最初から手附打つた使も私。サアそれぢやによつてなほやられぬ。善九郎暇やつたぞ。エ、イ。イヤ悔りすな。覺えの

ある事。よう禮三をたはけ者に仕上げたな。末々は番頭脇にもしてやらうと。思ひの外の不忠者。引負萬事書立てて。お上へ願へば首のない奴。暇出すを有難いと。出で失せをらうときめ付くる。地蔵藏主の正眞に。尾の出た大和の善九郎狐。掻き消すごとくフシ逃失せける。地邊の財布に岩川が。調金子しつかり受取りました。禮三様錦木様。お二人の身の上は。次郎吉が命にかけて。ちやがお才様とやらも禮三様に女夫の約束。男は一人。女中は二人。一つに束ねて世話もなるまい。ハテどうせうと行當る。ソ次の座敷の中から取つて。詞其女中預りましたよ。ム、さういふは何處から女中の聲ちやが。此子と近付のお人か。イ、エ近付ではないけれど。岩川様の預り憎い女中様。千羽川の吉兵衛が女房。よつが預つて歸りたい。殊に三島彌太夫様。大坂の藏屋敷お勤め

の時。お目かけられた吉兵衛殿。其彌太夫様の娘御。世話せねばならぬお方。氏神様へ参つた序。立寄つた此惠海庵。幸ひの所へ來合せたも。明神様のお引合せ。お才様の身の上。どうぞ私に世話さして下さんせ。頼みますると差當る難儀を救ひ投げかけて。頼むは天満千羽川隠れフシ内儀の手取なり。ヤレ嬉しや。よい買人が出來たぞ。吉兵衛殿に預ければ儲。そしてまあ。病氣はよごんすか。此間は大方よごんす。ヲ、そりや嬉し。あの人が出やしやれぬと。私やもう片腕もがれた様で。ほんに誓文。早う本復しられます様と神々を祈つていあんす。イヤもう此方の人もお前の親切。陰ながら悦んでどうぞ秋の角力には。岩川と取りたいと。力んでばつかり居られますと。地片屋かはれど。シかはらぬ交際。岩川最辰の禮三郎。調エ、おれが嫌ひの千羽

川に。世話頼むのは口惜しい。コリヤヤイ。勘當の身になつて相撲取の最辰所か。汝が大の最辰を受けねば。立たぬ様になつたわい。頼まにやならぬ二人の衆。今迄の様に岩川。々々と澤山にいふことならぬぞ。ア、これもいらぬ世話。何事も皆後生菩提。なんまみだく。涙を繰交せて。しをく歸る。二人は娘とも男とも心ばかりの暇乞。只伏拜む。フシ親子の別れ。いづこかは。くつわや左右衛門。幸ひ好い所。錦木太夫が身受金。ソレ五百兩と書出せば。一札。せば岩川が押開き見て不審顔。伊太夫の代は七百兩。まだ二百兩足りませぬ。イヤそりや手附に二百兩善九郎が持つて往た筈。けもない事。慥な鶴

屋の禮三様。そのお顔が手附ぢやと思つて。二百兩が一兩も取つた覚えござりませぬ。今聞きや御勘當とやら。跡金の濟む迄は錦木は連れて歸りますと。搦手を取れば引返し。詞今日一日は揚の女郎。指もさゝす事ならぬ。明日の朝迎ひおこした。跡金は此岩川が呑込んでゐる。若旦那。スリヤ是も善九郎めが仕事。思ひ廻せば何奴も此奴も。皆共謀と見える。サア取分け憎いは九平太め。岩川頼む殿前の仕返し。ぶつてくぶち殺したも。サアくよござんす。コレくつわや殿。此方様往にしなに。隣座敷の九平太様を。爰へ呼んで貰ひましょ。したがわしが顔は出し憎い。此仕返しはお前にさす。怖い事はなんにもない。岩川が控へてゐると。炬燵の櫓取つてのけ。蒲團すつぽり關取の。體を直に櫓なり。詞何でも危うなつた時は。炬燵の傍へ連れてお出と。

いへば呑込む禮三郎。詞皆邪魔になる隠れたく。是からおれが荒事を。お目にかけん。堀四股踏みしめ。待つ間程なく出て来る九平太。詞身に逢ひたいといふは誰ぢや。イヤおれでござんす。何ぢや二才めが何の用ぢや。ぐつと用のあるのぢや。大儀ながら一寸炬燵際まで出て貰ひましょ。へ、しやらな蚊蛸始め。何なと早く言うて仕舞へと。炬燵にどつかり。フシアアしてやつた。詞別の用でもない。最前汝や如何して撲つた。其仕返しに撲据あるのぢや。ハ、くくく。うぬがさまで身共を素町人め推參至極。イヤ推參呼ばはりせまい。今迄こそなれ。勘當受けたら破れかぶれ。屋敷でも。侍でも。何でも十九文ぢやぞ。イヤ慮外なと抜きかくる。鑑をぐつと後から。抜けぬはどうぢやと狼狽中。胸ぐら掴む禮三郎。ちよございすなと。突放せば。鑑返しに眞逆様。詞もう了簡がと掴み付く。地足首取つて締め上ぐれば。詞アイタく。うぬ何喰うてうせをつたやら。つがもな力になつた。ヲ、こたへたかと又どつさり。筋斗返り山雀投げ。命からん。體の探掃箒の背打びつしや。打伏せられてフシ興覺め顔。詞うぬ武士をひどいめに合したぞよ。此返報は仕様がある。待つてをらうと炬燵の傍の尻目にかけて。フシ逃歸る。詞出来た。禮三様。強う見えた。イヤもう炬燵の櫓がよう利いた。したが待つてをれとぬかした今の詞が氣味が悪い。ハテ何としませう。大方道に待伏せ。彼方からしかける喧嘩。せうことがない。何十人でも撫切にする分。私に付いてござりませと。地鯉口寛げフシ立出づるを。およつが呼留め。詞岩川様御無心がある。お才様をお供するは此方の人。吉兵衛殿に成り代つて預か

る。私女でも男の名代。お前の其魂を。わたしに貸して下さんせ。イヤこれは。

第二

サアお前の方に入る脇指。若しそれが用立つた時は。お前は下手人。錦木様や禮三様の跡のお世話は誰がするえ。殊にお前ばつかり目的に早う達者になりたいと。養生する吉兵衛殿。お前に若しもの事があつたら此方の人も病が重る。大事の命爰で捨てる所ぢやあるまい。末々お二人見届ける心の堅めに其魂。此吉兵衛が預かりましょ。ム、誤りやんした。吉兵衛殿に岩川が魂。しつかと預けます。エ、忝いよう聞届けて下さんした。いよく〜變らぬ二人が魂。見届けた禮三が證人。西はお才東は錦木。御無事でやいのと本妻妾。池田の關取。難波の名取。勝負は秋の相撲まで。おさらば。さらばとユリ。三重へ別れ行く

芝居は南。小オクリ米市は北。相撲と能の常舞臺。堀江々々と國々へ鳴り響きたる岩川が。角力の内は夫婦連れ爰に堀江の假住居。見世は初日の飾物半紙。毛氈煙草盆オクリ羽織脇指フシ取。江戸ギン酒は杉ばへ米俵。よその軒端を假初もフ賑々敷ぞ見えにける。詞扱積んだの見事何ぢや羽織脇指米もあるえらい張込ぢやの。いや又二三年こつちの角力に減多に負けた事のない岩川。したが今度の角力には。千羽川が病氣故はすむまいと思ふたが思ひの外きつはずみ。ソリヤ其筈。勸進元の顔の好いのに江戸方九州方残らず登り。岩川といふ最良の強い力の強い。あんな男を持つ者の顔が見たいと。地表から内を覗いて高々と。夫の噂女房おとは。出合頭いあがしらに聞く嬉しさ顔に少しは紅桔梗の。

前垂の紐ヲシ繩暖簾。地上げてによつこり。北野屋の七兵衛でござります。これはく〜島の内の七兵衛様能うお出サア〜地爰へに打通り。詞扱まあきついはすみ様。千羽川が出ぬ故にどうあらうと思ふたが近年の大入。今日は大方爰の關取が取らしやるであらうと思ふて。見物に來た序ながら鳥渡悦びに参りましたか。關取はもう往てで御座りましたか。イエ〜今日は叶はぬ用事に就きつい近所まで参りましたがもう戻つてござんせう。マアほんにいつぞやはいかいお世話で。練物を緩りと見物致しまして忝うござります。いつでも鳥の内の祭は。俄が多うて賑やかなこと。私等は在所者故。物見だけいとえてはこちのに叱られます。イヤモこちらの方も門がざわつくばかりで。奉公人が動かねば肝心の商ひが少ない。イヤ斯ういふ中に遅なつたら入

られまい關取へ好い様に。頼みますと座を立上れば。ア、忙しない。まあ御緩りとお茶なりと。イヤ遅いと好い場がござりませぬとオクリ挨拶。フシそく〜歸りける。道真町中。の最良に肩も岩川が鐵が獄陀多右衛門と、此方の人戻らしやんしたか。陀多右衛門様もようお出で。初日から未だお目にかゝりませぬが。きつい大入でお目出度うござります。アイそりや五でござんす。見物の足が早さに。そろ〜行かうと出かけた道で。岩川に逢うたによつてそれぢよつと寄りました。それはマア〜ようこそお出で。したがまだ漸うと今の先。權太鼓を打出しました。マア緩りとお茶なりと。地會釋に波出す端香より。心の花香ぞ愛想ある。詞コリヤ女房共。留守の内へ今日の角力割は持てこなんだか。イエ〜。まだ何にも持

ては。ハテ埒の明かぬ。今迄知れぬは何ぞめでもあるかいの陀多右衛門。サアおれも初日に鈍な角力取つたによつて。何でも今日はと思つてゐるが誰と合はずぞ。相手によつては魂膽も工夫もして見にやならぬ。いつそ行て聞いて來うかい。ハテまあよござんすわいな。其内には持て來う。幸ひ貰うた肴もある。主と一所に飯上つて行かしやんせ。地ドレ持らうと木綿襪かけまく神にあらねども。菩薩廻りの女房は、ラシ勝手へ立つて入りにけり。詞岩川様お宿にござりますか。新町の大坂屋から参りました。左右衛門申します。錦木太夫が身請の跡金。今日中に遣はされませぬと。こちらに身受の客衆がござります故。其方へ相談致します。お前のお顔を立てまして今日中は待ちます。明日になつたら此方へ太夫をやります程に。其時いちむぢのない様に。念を入れいと申されましたと。地言ひ捨て使は立歸れば。詞ヤア其身請外へさしては岩川が立つものかと。地駈出すを。詞コリヤ〜岩川。其身請の譯も其客も。此鐵が獄が知つてゐる程に。マア行かずともよいわいやい。ム、すりや。其身請の相談を。われがよう知つてゐるか。シテ其身請の客といふは。イヤ外でもない俺ぢや。ヲ、鐵が獄陀多右衛門ぢや程に。マアさう思うて居いやいと。地俄に骨氣も節くれ立ち。頬髯撫でて、フシのさばり面。詞ム、聞えた。こりや九平太が腰ぢやな。尤も汝が爲には大事にかけにやならぬ人ぢやが。爰をよう聞分けてくれ。あの錦木太夫は。おれが親方の禮三殿とはきつう深い中ぢや。其錦木故親の勘當まで受けられた事。こりや言はいでも知つてゐる事。其處らはまあ取つてほつて。五百兩といふ金まで渡し。跡金の二百兩

才覺する其内に。太夫殿を外の手へ渡し
ては。どうも岩川が顔が立たぬ。わがみ
が中へ入つたこそ幸ひ。何卒そつちの身
請を。じやみる様に言廻してたもるまい
か。鐵が獄。コレ頼む。地く〜と詞を下げ。
事を分けたる一言を。鼻であしらふッ
惡者作り。コヲ、此身請はどうせうと斯
うせうとおれがまゝぢや。われが頼む様
にしてやるといつたら。勝手はよからう
が否ぢや。わりや惠海庵で九平太様をひ
どい日に合はしたげな。ヲ、強いこつち
や。其仕返しを頼まれてゐる此鐵が獄。
あんだらくさいこといふない。ム、すり
や其時の事が根葉になつて。それ故身請
の邪魔するのか。イヤ邪魔するとは何の
こつちや。コリヤ錦木が身受は金づくぢ
やぞよ。僅か二百兩ばかりの跡金を。團
子の咽に詰つた様に。ぎつちかはと味え
面かくとは違ふ。七百兩といふ金を。が
かりに出して身請するのぢや。なる程尤
もぢや。兎角めい〜親分を。大事に思
ふから起る事ぢや。何と斯うしてたら
ぬか。おれを九平太様へ連れて往て。貴方
の胸の晴れる様に。撲たしなりと踏まし
なりとさして。身請は此方へさしてたも。
わがみの言やる通り金づくの事なれば。
今日中に跡金さへ出来れば。頼む事も何
にもなければ。サちつと急に出来にくい。
尤も在所へ言うてやつたら。工面の出来
る事もあらうが。親どもの耳へ入れとむ
ない。それでわがみを頼むのぢや。又身
受しやつてからが。とても太夫が九平太
様の女房にやならぬ。ナリや畢竟が費と
いふ物ぢや。黙れやい。太夫が隨はうが
随ふまいが。それにや構はぬ。九平太様
には金がたんとあるによつて。其金でわ
いらが頬をはり廻すのぢや。サイノ。金で
頬をはらずとも。此岩川をどうなりと腹
の癒る様にして。身請は此方へさしてた
も。コレ一生の頼みぢや。恩にも着よ。
コレ手を下げる鐵が獄と。地頭を疊にす
り付けて。スエテ頼む心ぞ切なけれ。コム
ムそんなら何か。踏まれても撲たれても。
言分ないといふのか。イヤモ聞分けてさ
へたもれば。縦へ此身は如何なつても。コ
リヤ相談が面白いわい。九平太様の名代
に。マアちよつと斯うせうかいと。地立
蹴りにどうど踏飛ばし。何ぢや何びこ
〜するのぢや。わりやたつた今。言分
ないと言つたぞよ。但し言分があるのか。
イヤ〜。何の言分があるもので。サア
〜何うなりと心任せに。ヲ、其筈ぢや。
惠海庵での意趣返し。わりや九平太様を
斯うくらはしたか。イヤ斯う踏んだかと。
地弱みを付込む厄病のッシ髪も頭も引き
しやなぐり。地さいなむ折から表へいき
せき。コハイ今日の相撲割でござります。

もう追付け士侵入ちや程に。早うお出なされませと。フシ書付投り込み立歸れば。地陀多右衛門押披き。肩何ちや。鐵が嶽に岩川。ム、すりや。今日は岩川と鐵が嶽。コリヤ見い。俺と汝とが相撲ぢやとやい。ム、時も時折も折。わがみと俺が立合とは。ハテ氣味合な事ぢやのと。地いふも心に一思案。コリヤわれも池田の岩川といはれては。國々へ名の通つた者。又俺も大名のお抱へ。殊に大坂は初めてなれば。此相撲しくじるが最後扶持離れぢや。すりやこれ二人ながら大事の相撲。九平太様の名代に。惠海庵の仕返ししたれば。此算用は濟んである。又錦木が身請の事はおれ次第。ヲ、此鐵が嶽が心次第ぢや。水心あれば魚心あり。頼む事も頼まれる事も。まあ今日の相撲うてから。其上の事にせうわい。われも随分神佛でも叩き廻して。俺に勝つ様にせい。した

が可愛や。おれと取つたら骨身が碎けて。重ねて土依踏む事ならぬぞよ。どうぞ頭取衆を頼んで。振換へて貰うてなりと。取らぬ方が勝ぢやある。それとも取つて見ようと思ふなら。魚心あれば水心あり。ナ岩川。土依で逢はうと。強い詞の何處やらに。味な鐵棒引きずる雪踏。フシぐわらつかせてぞ出でて行く。地跡に岩川兩手を組み。エエ思案にくれて居たりしが。調段々日限の切れた跡金。親方が催促するも九平太が所爲。とかく鐵が嶽を抱込んで。あつちの身受を延して貰はうより外はない。と言うても一筋繩では往かぬ奴。抱込む仕様は。ム、太夫が身請はおれ次第。魚心あれば水心あり。ヲ、こりや今日の相撲を。振つてやらざるまいわいの。ソレ〜。彼と我とが立合ふこそ幸ひ。美しう振つてやり。彼奴に勝を讓つて置いて。其上で退引させず。

頼むが近道上分別。とはいへ名取の鐵が嶽。何う魂膽してなりとも。投殺さにやならぬ相撲。いはば一生懸命の。大事の相撲を金故に。振つてやる岩川が。心の内切なき様さ。地摩利支天にも見放され。相撲冥加につきたのかと。思ひ廻せば廻す程空恐しさ口惜しさ。思はず拳を握り詰めエエ身を頼はして。男泣き。始終立聞く女房が涙隠して。調ヲ、こちらのとした事が。先刻にから飯拵へて待つて居るのに。爰で上るか奥へ据ようかと。地何氣なければそ知らぬ顔。調イヤモ飯なら喰ひたうない。ホンニ角力から呼びに来た。地ドレ行て來うと立上れば。殿。ソレ髪がきつう亂けてあるぞえ。人中へ見苦しい。地結うて上うと取出す櫛箱。調イヤ結うて居たら隙が入る。つい撫付けて置いてたも。ヲ、お前もこんな髪

して。行かしやんした事はないが。地い
つその事何もかも。言うて聞かして下さ
んせぬか。調ヤ言へとは何を。サイナ。
お前の心のナ。それ縫れ髪。撫付けて置
かうより。寧そさつぱり地いはいしやんせ
ぬかといふ事いな。調イヤいふまい。
何ぼわしにいへといやつても。高が女の
手業。いうたら大方おくれが出よう。つ
い撫付けておいてたもと。地傍に直れば
女房も。押しでは言はぬ縫れ髪。鬢の。
ほつれを。撫付ける櫛の背より夫の胸。
映して見たき鏡立。調サアよいか見さし
やんせと。地向ふ鏡の蓋取つて。フッ映
せば映る顔と顔。調申し岩川殿。色も青
さめ。地そして目の内もうるんで。どう
やら氣色の悪さうな顔付。もう今日の相
撲へは。斷うて行かしやんすな。調何
をあんだらつくぞい。いつはともあれ
今日の相撲は。鐵が嶽と此岩川。初日の

出ぬ先から町中が。待つて居る暗の出合。
何でも鐵が嶽を。土俵の砂へ埋まにや置
かぬ。イヤそりや嘘ぢや。今日の相撲は
鐵が嶽に。振つてやるお前の心と。言ふ口
押へて。調聲が高い。スリヤ先刻から
の様子残らず。アイ一聞で聞いてをりま
した。僅かな金に手詰つて。難儀さしや
んすが私や悲しい地事そ此譚親父様に。調
たはけ奴。それいふ程なりや此様に。人に
擲かれ踏まれはせぬ。昔氣質の親父様。
打明けて物いふと。禮三様に意見の何の
と喧しい。若いお人の水の出端。若し命
生害になつた時は。千日に刈つた查ぢや。
ア、急な事でさへなくば。工面の仕様も
あらうに。僅か二百兩の金故に。大事の相
撲を振つてやらざるまいと思へば。腑
甲斐ないやら口惜しいやらで。おりや胸
が裂ける様な。ヲ、道理ぢや。くくく
く。フッさりながら。地夫程の大事の事。

連添ふ女房に隠して居る。お前の心が聞
えぬと。怨み涙に。フッ時移り。地早や
追々の呼使。調申し土俵入でござります。
早うお出なされませ。地ちやつとくくに
岩川が。しをくとしてフッ立れば。
調もうお前は行かしやんすか。ホ鐵が嶽
を抱込んで。工面の通りいきや格別。若
しも行かねば絶體絶命。是が暇乞になら
うとも知れぬ。さらばと。地ばかり一聲を
フッ跡に残して出でて行く。調コレまあ
待つて岩川殿。たつた一言いひたい事と。
地見れども跡は雲霞。調コリヤ斯うして
は居られぬ所。夫の命にかゝはる勝負。
地わしもこれから相撲場へと。帯引締め
て夫の跡慕うてこそは。三重へ行く空に。
地響く櫓のとうからと打仕舞うたる太鼓
より。鳴り渡つたる岩川と鐵が嶽との相
撲割。表にべつたり貼紙も。はりさく木
戸口押合ひへし合ひ。早や土俵入事終り

相撲の數々取盡し。フシ中入前ぞ勇まし
 き。關東西々々道頓堀宗右衛門町。北野
 屋七兵衛様急用でござります。一寸木戸
 迄お出なされませと。地又も呼出す相撲
 の名告。入れかへ。〆勝負も。今一番
 とフシ夕日に連れて。關西は岩川々々。
 東は鐵が嶽〆と。道甚屋名告上げられ四
 股踏鳴らす鐵が嶽。此方は猶もしよげ鳥
 のオクリしを〆。上る土俵の上。フシす
 は千番に一番の。相撲と力む幾萬人。し
 づまりフシ返つて見物す。關片や岩川岩
 川。片や鐵が嶽〆。せくまい〆〆せか
 ずと顔を見合せて。やつと引いたる行司
 の團扇。直に付入る鐵が嶽。ずつと兩腕
 指込ます。地元來覺悟の岩川が。既にフシ
 危く見えたる所へ。關進上金子二百兩岩
 川様最良よりと。地聞くよりぐつと岩川
 が。始めの氣色何處へやら。鐵が嶽が兩
 指を。ほぐして土俵へ引つくり返し。力

士の如くつつ立てば。
 よいや〆と數萬人。
 一度に立つて手を叩き
 どよみを作る閑作る。
 樽太鼓も打出しの表は
 人の。三重へ山なせり。
 フシ次第々々に。散る
 人の中に紛れていきせ
 きと。襦を昇せて北野
 屋七兵衛。來かゝる向
 うへ岩川が。胸のもや
 〆〆さつぱりと。フシ
 我が家へ歸る戻り足。
 關ヨウ〆關取様出來
 ましたと。地跡から付
 いて來る人に。見付け
 られじと襦片寄せ。七
 兵衛が素知らぬ顔。ハ
 ハ關取。さて〆今

		<p>総領師松</p> <p>關取千兩幟</p> <p>俊茂武</p>
<p>多分... (Small vertical text columns)</p>		<p>竹田義夫</p> <p>段平... (Small vertical text columns)</p>

附番の行興座本竹月八年四和明

日はきついお手柄。ホ七兵衛殿。見てぢやあつたか。見た段か。何うやら取口は悪かつたが。引つくり返した其強さ。イヤモ今日の相撲は譯があつて。きつう取悪かつたが。味な事が張合になて。味な事とは二百兩の纏頭か。コレ其纏頭やつた旦那殿が幸ひ爰にぢや。逢うて禮をいはしやりませと。掛垂を上げれば。詞ヤアわりや女房。岩川殿。随分健で居て下さんせ。そんなら今の二百兩は。コレ關取。お内儀の勤奉公。志の二百兩。女房ども。なんにも言はぬ忝い。サ裾の衆。やつてと北野屋が。氣轉利かして駕の垂。内は歎きに暮近く。人相告ぐる鐘諸共別れ〜にユリ。三三へ行く末は

第三

ヘルナン 昔の京と難波浦。春雨しげき夜の道。オナリ錦木諸共。禮三郎。相合傘の濡

事も。フシひつたり濡れる。横しぶき。コレ關太夫。道々も言ふ通り。わがみの身請の跡金故。岩川の女房が。勤奉公すると聞く。代りに其方を北野屋へやらうとは思うてゐるが。廊と違うて。いかう勤めにくいといふ事ぢやぞや。ヲ、禮三様とした事が。義理より辛い勤めはあるまい。掛お前やわしが身の上まで。段々世話になりながら。詞おとは様に勤めさせては。どうまあ義理が立つものぞ。是非とも代る此身の上。詞請出されぬ先ぢやと思や。掛わしやひとつも厭はぬと。エ言ふも涙に聲くもる。詞ヲ、道理ぢや〜。何を言ふも皆わし故。日外圍右衛門めに街られた金の事。詮議をせうにも。肝心の團右衛門が行方は知れず。何もかも身にかゝる難儀の果は。一足つつに消えて行かすばなるまいと。掛我が身は暗きフシ闇の夜に。掛光る眼も蛇の目傘。

向うにすつくと鐵が嶽。詞ヤア好い所で錦木太夫。岩川奴に負けた意趣晴し。うぬをこれから連れていて。九平太様に手渡しすりや。一廣金になる仕事。サア〜うせいと引立つる。ヤイ鐵が嶽。錦木は禮三が身請して。今では俺が女房。其女房を連れて往て。金にせうとは盗人同然。汝を代官所へ連れて行く。サアうせをれと。掛引張つても。ちつとも動かす。詞エエ毛二才め何ひろぐ。うぬに引張られて行く間。此手は如何して居ようと思ふ。馬鹿つくさずと太夫を渡せ〜いやといふが最後。幸ひ邊に人もなし。手短かにばらすぞよ。ヲ、縦へ此身はどの様になつても。太夫を遣つては岩川へ言譯立たぬ。ヤア其岩川が猶りたいぢや。疫病神で敵の汝の渡さにや。掛斯うぢやと踏飛ばせば。なうコレ待つてと錦木が。立寄る腰際引。掛み。もう了簡がと武者振り付く。禮三

が首筋引つとらへ。ひばり骨見る様な態をして。猪口才すと引寄せて。磔はりつけ拳こぶしのめつた打ち。かよわき錦が手に當る。小石擲んでばらばら。磔はりつけに眼くらまされ。油断大敵禮三郎。小股取られて鐵が獄がら。體の重みにうごめく背中。すかさず禮三が取つて伏せ。愛構はずと早う。必す怪我して下さんすなと心は跡に島の内。フシ北野屋として別れ行く。反ね返して鬚髮ひげ擲んでぐつとのつか。埋り。サア太夫を何處へやりをつた。埋んだ所をサア吐かせ。此鐵が獄を盗人とぬかした其類たぐひ。獄裂がら裂ひびいてくれんと踏付け。引廻ひきまわされても纖弱せんじやくき禮三。手向ひならぬ無念泣き。向ひかに手に合ふ物ちやとて。餘り憐あはれい胴窓たむけちや。ヤイ胴窓とは汝が事。九平太様へ極まる身請。岩川めが邪魔するも皆汝から起つた事。地體生白たまごけたしやつ類。見る度ごとに虫

唾つよが出る。泥ぼに似合うたこれ喰へと。擲なんだ泥を口の内。もうこれ迄と抜きかくる。柄元しつかと。調ハ、アやるわ。こりや汝毒もるのぢやな。小さい形して。相撲取を殺さうとは。鯨くじらの地躰ぢたい。輪わ叶ははぬこつちや。サア切れと引抜いて。互に争ふ其中に又も降りくる。雨の足。禮三は引く足放さぬ我武者。あなたこなたと引廻ひきまわされて稻村の。内より出づる刀の光。鐵が獄が肩先ぐつすり。うんと一聲。雨無三寶手が廻りしか何とせん。心おつ。一刀。うぬえらい事ひろいだなと。抜いて切込む白刃と白刃。稻村蔭かげに窺のぞふ曲者。あやなき闇の黒裝束。だんびら提ひきげ後より。助くる加勢の滅多切り。禮三が所爲しよゐと思ひ込み。切込む深田の泥まぶれ。猶降りかゝる。雨曇り。足もしどろに胸の間。憎しと思ふ一念力。刺さりくる。曲者が。威おどす足音禮三郎。

又も怖氣おその身もわな。心せよりに千鳥足。フシこけつ轉びつ逃歸にげかへる。地とつくと見濟みまし探り寄り。留めの刀。一刺り。觸る足元落ちたる鞘。納めた思案の。向うへ提燈暫く忍ぶ。フシ身の廻り。雨具に圍かこみ立派の侍。家來を先に來る道筋。落ちたは何と手に取上げ。明あきを持って提燈の。灯影とうかげに見付くる遠の血汐。切倒されし大男。ヤアこりや身が屋敷の抱への相撲鐵が獄。何にもせよ心得ずと。内改め紙入より取出す一通。詮議の種と聞く間讀む間稻妻の。提燈ばつたり曲者は跡を。くらしし。三重へ落ちて行く

第四

昔は西に。金珠かねたまが關今は東に白川の。關も物かは磯に見る。なみくにて大阪の關はゆるさぬ場所に。類ひ名取の千羽川。其川風にもまれては。四つにも組まん柳

腰如才。内儀の世話になり。お才はさいつ頃よりも爰に。假住み假初の。縁を鶴屋の禮三郎。合せ骨牌のかゝる島。有る無し。ッ知らぬさま育ち。丁稚でもない相撲取のひよこと見えるうそく前髪門口から。藤繩半右衛門申します。吉兵衛様の御病氣ちつとよごんすか。今日糞網に取りました此繩お袴分け申します。

ヲ、お心にかかれて。殊に鯛は吉兵衛の相角力。追付け是にあやかつて力付かしやる吉左右よう禮いうて。御太儀やと。溜紙に百口先で。ころりとッしいはす手取鳴。合せの勝負讀む骨牌。一萬二千二萬五千。三萬八千がお才様の勝。アノどうしてこれが勝ちやぞいな。エ、不器用なお才様まだ覺えさんせぬか。サINA歌骨牌取ると違うてむづかしい物ぢやわいな。ナンノこれがむづかしい。禮三様に末永う合せの勝負。跡は女夫の一

番相撲と世間廣う出ぬけるかため。扇は小野川お才様よいやくとッ譽められて。赤らむ顔は朝日山。解けぬ心の禮三郎。イヤ合せに於ては我等きつい粹方なれど。斯う札が来てはいいかぬ。その管でもあり。此間から段々と詰らぬ身の上。どう思案しても叶はぬ。叶はぬ戀と思うたに。わたしが様な阿房に縁の悪縁でござんせう。又斯うも来るものか。いつそ此方から身を捨てて南無三寶命を取られた。ア是なア氣にかゝる事言はしやんすな。イヤもうきついで目にはされとんと禮三が絶體絶命。アレまだいなお才様の業ぢやない。其科はお前ぢやわいな。そりや何故に。ハテお前が切らしやんしたぢやないかいな。エ、イ。何をわしが何時切つて。ハテ今の程お前

の出に切つた札。科人はやつぱりお前。身を恨んだがよいわいなと。戲口にいふ事も。疵持つ足の裏背戸にッ心置かゝる。折も折。破綻笠人相は見ねど見す見す悪者作。うそく。覗く妻素振。小氣味悪さに禮三郎。アレ誰やら人がと納戸口。はづす弱みへ疫病の。神様株が伸上り。こりや花々しい勝負でござんすの。ドレ一資本して來うか。内儀様四五十兩貸して下あれ。貸しても借る。貸さにや根太切り引つたくるのぢやと。喫めとも言はぬ烟草盆。煙管ど太う。ッしいやがらが借りた。易い事やの。五十兩など五百兩など。何ぼなと貸さうがこな様誰ぢや。ついで見た事もない。術ない人に一文半錢でも貸しては此方の人に立たぬ。此女中様と合せ骨牌のあぢやら事。勝負事何のと。人聞の悪い。こつきの威し喰ふのぢやない。出直さんとッ取りあへず。イヤいなめ上るな。御法度の勝負

事を商賈にする證據には。今おれが影を見て隠れをつた男め。ちらりと見てもさす物ぢやないわい。御妻相手にするのぢやない。爰の亭主は何といふ。亭主に逢はう。イヤ此方こちの人は瘧おたひを病んで久しう寝て居らるゝ。殊に今日は發日おこりひでそんな事聞かすと忽ち大熱。そりや止しにして下さんせ。だまれやい。病氣ならてこのぼんやせいといふ赦しがあるか。出さらにや爰へ引すり出す。ア、これこれ。そればつかりは堪忍して。コレ地拜みますと詫びる程。詞何ぢやあらうと亭主めを代官所へ引きすつて行くのぢや。出され地く〜と猶聲高。病家の一間洩れ聞え。詞およつ〜。おれに逢はうといふのは誰ぢや。地ドレ出て逢はうといふ聲も。病に屈せぬ大男大阪一番羽羽川と。一日にしるゝ關取風。見るよりぎよつとラシ呆れ顔。詞わしに逢ひたいとは此方こち様か。

アノ爰の亭主といふは。アイわしでござす。イヤア地こりや敵たなはぬと逃出す。詞コレ〜〜待たんせ。様子聞いてから其跡で。きつと馳走もせにやならぬ。其御馳走が痛み入ります。イヤ〜遠慮のないう事。わしやもう喚なぐが知つて居る通り。士俵の上の勝負より外。腕立うでたてする事が嫌ひ。久しいの煩ひ餘り氣が重い故。昨日月代はして見たれどまだ瘧おたひが落ちぬ故。いつからやらふつとりと力業ちからわざをして見ぬが。腕固うでがためにナア喚なぐ。どこぞ入らぬ體からだがあるならぼき〜。掴み碎いて見度い。エイ。ハテこれ何を其様に顛ひるふのぢや。ハイこりや。お前様の瘧おたひの身代りでございます。ちよつと爰へござんせ。イヤもうそれへは憚り多い。ハテ行かんせと女房に。地突きやられてもびつくびくフッ蛇へびに追はれし蠶ひま。地頬ほ見てやらうと禮三も立出で。詞ヤア汝おれは善九郎め。關右衛

門と一所になつてよう勤當しんたうさしたなど。胸胸から取る手をしつかと取り。詞コレ禮三殿此善九郎ぜんくわうは此方こち故に斯ういふ風體。わがみは恨まず逆さかねだり。そればかりぢやない。一昨日おとつひの晚難波おんなば裏で銭が獄が殺された。其殺人も大方ちゆうぶ遠はぬ。詮議せんぎがあるサアわせいと。地引立ひきたてて行く善九郎が。肩骨かたほね掴んでぐつと押付け。詞かゝ。手拭と手はしかく。地顛立ひきたてさせぬ猿轡さるもつ。五尺の體からだフシくる〜巻まき。詞詮議せんぎのある盜人の問何處とこへなとぶち込んで置きたいが。地ハテどうせうぞ納戸のうどから。幸ひ爰に明半蓋あきはんがい。詞イヤ〜。のら猫の爪研ぐ様にばたついては面倒な。地響こを爰へと疊たたの下。幸ひ炭櫃すすびのあなかしこ逆さかさぬ思案しあんの極樂ごくらく落おし。跡踏あとふみみしめて立直り。詞マアこれで片付いた。あゝして置いたら此方こちの儘。禮三様も何やかや。定めて

意趣もあろけれど。晝は目に立つまあ晩の事。成程々々とつとこれで胸が晴れた。今夜中に岩川にちよつと逢はねばならぬ譯。通^り行て来ませうと立出づる。詞申し／＼お前の脇差はどうなされた。ヤ、アノそれは。ござりませぬか。御勘當のお身の上は猶以て世間へ外聞。何故丸腰でござります。地といふに返事も差詰り。行當る顔尻目にじろり。大方誰ぞを頼んで質物にお入れなされたである。あの脇差は親御からの御秘藏ぢやげな。すりや見知りのある一腰。何處から何う廻つてひよつとひよんな所の手に入れたら。お前ばかりか親御のお名の出る事。實は身の指合せ。金さへあれば買はれる道具でさへ大切。まして親御の血を分けて。讓受けたお前の身は猶大切。何處へお出でなされうとも。必ず命を大事にして。聊爾な事なされますな。斯う言や艶らしけれ

ど。前方はしみ／＼と物言うても下されんだが。お才様の縁に連れて。今では次郎同然に。懇ろにして下さるお前ぢやによつて此御意見。悪う聞いて下さりませと。御合點かえ。早うお歸りなされませと。明けてそれとは夕間暮。口にはねど過分さを。拜むが諸事の禮三郎。フシ心残して出でて行く。申しお早うえも口の中。まだ夫とは言ひ兼ねる。おぼこ娘の案じ顔。これは扱追付け戻らしやる人を。もう一生も逢はれぬ様に。何でございますぞいの。尤も錦木といふ色があれど。禮三様故に駈落までしてござつたお前。氣遣ひせまい吉兵衛が添はします。とはいふもののお前には許嫁のお侍。丹波の御家中津田兩助様。まだ縁は切れませぬぞえ。萬一先から大坂まで詮議すまいものでもない。かゝ餘り外へ出しますな。ナニそりやお才様よりお前の

事。今とつくりと養生して。秋の相撲から出にやならぬ大事の體を。ちつと好いと月代刺つて氣丈立が悪いわいな。今日は又發日ぢや。寒けの來ぬ内蒲團でも着て居やしやんせ。何ぬかすやら夕立のせぬ先に。下駄はいて歩かれるものかい。なんぼ煩うてゐても。地取などすりや氣合が好うなる。おいらが内に寝て居ると。烏籠に鶴入れた様で氣が詰まつて一倍悪い。そんならどうなと勝手にさんせ。何でもわしが言ふ事は聞かんせぬ。ヲ、相撲取は女房のいふ事聞かぬのが好いのぢやわいと。無きこつな詞も關取の。フシ中のよさとぞ知られる。地日も暮れ過ぎて藏屋敷の奴が提燈目印を。尋ね來る立派の武士。羽千羽川の吉兵衛殿は此方か。アイ／＼御方でござります。イヤ苦しうない者。在宿ならば御意得たし。手前が事は津田兩助と申す者。エ、イ。あの兩助

様。そりや丹波の御家中。いかにも左様。エ、これはまあ時。兩助様ぢやといなアと、知らず撃より驚くお才。心半亂半蓋の。ふためき隠す小屏風に。押圍ふン間もあるやなし。御免ならうと、ッ打通れば。素知らぬ顔に手をついて。吉兵衛と申すは私。津田兩助様と申すはついに承りませぬが何用あつてかようこそお出で。私も癪を病みまして。見苦しい病家。無禮は御免お茶上げませいと。落付いて。腰をすゑたる心の配り。程存じ召されぬ筈。手前初めて参つたは。ちとお身に尋ねたい事あつて。其仔細は身共が屋敷丹波の抱へ。鐵が嶽といふ者。一昨夜難波裏にて切殺され。何者の業とも知れ申さぬ。此儘に差置いては國の耻辱。若しは相撲の意趣切か。御身の商賣體なれば。知れまいものでもないと存じて。ハアそれでお出でなされたか。そり

やもう憚りながらきつい御了簡違ひ。マア第一負けても勝つても。相撲に意趣といふ事はない事でござります。殊に此仲間で喧嘩事が厭しい法度。又思召しても御覽じませ。相撲取が我儘に。喧嘩を好いて致さうなら。世界に人種はござりませぬ。ム、尤も。然らば今一つ尋ねたいは。お手前は近江の屋敷三島彌太夫に入るとな。其娘お才を女房に申受けうと契約した兩助。然る所お才には。不義の男あつて勘當せし由。今にも顔を見合すれば侍の意地。眞二つに打放さねばならぬ時宜。彼の不義の男は鶴屋の禮三と聞いたばかりついに顔を見知らず。こりやお手前存じて居ぬか。ハ、くくく様様の事をお尋ね。相撲取と申す者は。大阪中の町人衆。皆彼方から御存じなれど此方に一々覚えませぬ。山伏の内へ來た様に。ちとおなぶりでござりますかと。

猶押強う押圍ふ。屏風に女房が胸ひや。ステ力めばいと。身の顔ひ。吉兵衛もはつと計り。お侍様御救されませ例の癪で俄の寒け。女房ども。羽織羽織と。身に引つけて何處も彼も。ッ包包廻せし氣披ひ。顔も一曲朱鞘の一心に参つた者。拙者元は由緒の武士。浪人の世渡りそと致した劍術指南。面目ないが尾羽を枯らし。差換への一腰賣りに参つた。何と求めて下されまいかと。差前に差置けば。これはまあ餘儀ない仰しやり様。御浪人ののおみ定めて天晴お道具でござりませうが。町人の爲には猫に小判。人切る術存せねば刃物買ふ様がない。イヤ其脇差ばかりは。此方が買はつしやれにやなるまい。拵へは何にもせよ。心を篤と目利してお買ひなされて下

されい。ム、心の目利は私も不得手なれど。左様ならばドレ。ちよと拜見と、搦抜きかくる。細の血汐に鯉口びつしやり。

岡ナント其心を見ては。外の手へは遣られまいがの。イヤハヤ變つた所にあつた脇差。コレ。出所は兎も角も氣に入つた買ひませう。イヤ其脇差兩助が買申さう。いつかな事なりませぬ。吉兵衛が買ひましたシテ代物はな。千兩の折紙。

サア金がなくば買取りましょ。其買物はこれ爰にと。小屏風くわらりと引退くれば。何とする。サレバサ。刃物の代りに女中道具の小袖櫃。此場にあつては事の破れになりさうな物。中改めず此儘で質に取りたい。イ、ヤあの半蓋は。いやなら千兩、サ價はいか程なりと。先づ其心を兩助が。檢めんと立寄るを。取つて。突退け置上ぐる疊。下からぬつと以前の善九郎見合す浪人。ヤアお

頭といふ間稻妻吉兵衛が。袈裟にすつばと紅の脇差目先へ差出し。詞お望の心とつくりと御覽なされと。フシ居合腰。ヲ見事々々。細元より切先まで。微塵曇らぬ男の魂。ハ、ア天晴驚き入る。眼前

に人を殺した吉兵衛と。人の科まで身に引受ける心であらうが。それはそれこれはこれ。況んや其奴夜盗と見え。如何で首の無い奴。併し不思議なは最期の一

種にもなるべき物。ハテ残念と。兩助が。尻目に彼奴も底氣味悪く。吉兵衛殿。金子調達。只今急にもなりにくからう。其脇差は預けて歸る。有無の返事を拙者が宅へ。後程までに待ち申す。ム、御浪人のお所は。天王寺樂人町澤田伴龍とお尋ねなされ。澤田伴龍殿。今宵中に乾度參らう。然らばおさらば。お侍これにと。邪智を隠して立歸る。

詞兩助もお腹申さう段々仔細のありさうな事。身どもが用事は人殺しの詮議ばかり。武士が頼みに參つた詞反古にもなるまい。お身此詮議しておくりやれ。イヤ

人殺しは私。此奴今は盜賊なれども元は善九郎と申して鶴屋の手代。ム、それなれば猶以て。其奴は殺しても大事ない。此兩助様子具に存じて居る。鶴屋大恩の下人として。主人の金を横取した奴。凡

そ引負の科人は主人の家にて庭成敗に行ふが大法。天罰は遁れず自然と主の刃にかゝる。其脇差の出所は。言はぬが秘傳の折紙道具。地必ずく何時まで。御身を大切に。凶事のない様。お手前はまだまだ知るまい。お才が親三島彌太夫事。預りの長光の刀紛失の誤り。此刀が出ぬ時は彌太夫の身の大事。それに就て裁が獄が死骸の傍に。落してあつた此紙入こそ一つの手がかり。是を自身の手に渡さば。

其中に其方の入用の物もあらう詮議の筋が見えたらば。大儀ながら身が旅宿まで。

委細扱入りしました。シテ貴公様はいづ方に。イヤ旅宿の所書。無則ち認め参つ

たと。差出せば押披き。調ヤアこりやお才殿への去状。ヲ、道程僅か三行半。怪

我の無い様去荷の注文。無事に落付く身の行末。フシ此上ながら頼み入る。無萬事

後刻と諸事の譯。胸で納めた千石取。フシ蔵屋敷へと歸らる。無妻も立出で危い

所漸う通れた半蓋の。二人が悦び吉兵衛は。兩助が詞のはしく紙入の内より出

づる状一通。繰返し見て驚く面色。調心得ぬは澤田伴龍。どうでも彼奴には仔細

がある。コリヤ斯うしては居られぬと。無脇差ぼつ込み門口へ。女房内に氣を付

けいと。フシいひ捨てつと出でて行く。調サア。お才様悦ばしやんせ。今日と

いふ今日此去状が禮三様と女夫の固め。

無ほんにこれも兩助様の。おかげくと足跡を戴く疊むつくりと。思ひがけなき

フシ以前の浪人。無スハ盜賊といはせも立てず。およつが小腕提緒の早繩。打込む

戸棚の錠前しつかり。調お才怖い事はな

い。和女故に浪人した團右衛門ぢやエ、イ。吉兵衛を出しぬき。竹垣破つて忍び

込んだも。和女を連れて往なうばかりぢや。おれは汝に惚れて居る。汝は禮三に

惚れて居る。定めていやであらうけれど。かう縁が魅入れてからは逃けても逃がさ

ぬ。否でも應でも抱かれて寝る。爰へおぢや。アイ。ハテおぢやいなう。アイ。

エ、とつともう。悪い時にあれエ。無も女聲。調なんぼ呼んでも吉兵衛は爰ら

には居ぬわい。叶はぬ事ぢや枕直して抱かれてぬいと。無根根う仕込む蟒蛇眼。

逃がさぬ門口吉兵衛が戻りかゝつて戸を叩けば。内に物音吹消す行燈明かぬは不

思議と表から。踏碎く戸の破れ口。互に探る暗紛れ。闇は黑白なし指れちがふ。手に觸つたる帯の端。すつばと切つて團

右衛門。フシ跡暗まし逃失せたり。調吉兵衛様か。お才様か。帯解きひろげてコリ

ヤ何ぢや。無手に残つたる男の帯。ム、エ、此方様は。無禮三殿に添はさうと

思ふ吉兵衛をかはにして。こりや外に忍び男が出来たの。徒女郎。人でなし。サ

ア。道理ぢや。此言譯はおよ

つ様。無出て下さんせにぐわたく戸棚。錠捻切つてフシ引明ければ此方の人遅か

つたわいの。最前の浪人が。わしを縛つてお才様に無體の戀慕。ヤア。無

そんなら彼の浪人は。兼て話のアイ村岡團右衛門。扱こそ知れた。程は行くまい

此道筋。詮議の近道逸散に跡を。暮うて三追うて行く

第五

映太夫 塙 満満大川一飛に南のはづれ寺町筋。直には行かぬ右衛門うねくる野道幾筋も。眞一文字に。倉太夫 調ヲ、イ、伴龍殿と。映呼んだは誰ぢや。倉イヤ吉兵衛でござんす。映是はく。大方彼の脇差の返事。金子才覺出来ましたか。倉イヤ其約束の金子の代り。其許に買つて貰ひたい物があつて。映ム、スリヤ脇差の價に。ソリヤまあ何を。倉これと差出す帯の端。映ハツト惘り。倉副伴龍殿。こればかりは此方が買はにやなるまいがの。映ム、如何にも買はうかい。倉ヲ、價は千兩。こなたの胸に貯へた。悪事の算用受取ろかい。映イ、ヤ何にも覺えないと。塙振切つて行く朱鞘の鏢。倉しつつかと取つて卑怯な伴龍。副代物を見て返事もやらず。こりや何處へ行く。映イヤ其代

物所望にない持つて歸れ。倉いつかなくしかけた。出入は互の命。そつちへ賣るか。こつちへ買ふか。三寸組板巧みのばれ口。映放せ。放さぬ。映塙強氣と不敵。手練の當身にうんとばかり。倉下地の瘡に身はがちく。足踏みしめる。映塙其隙に逃げて。倉どつこい逃がさぬ。映調イヤサ伴龍は急の用事。退いて塙通せとかげ出す。倉向ふへ廻つて又取付き。映彼奴も一世の大事の奥の手。劍術達者の伴龍に。倉一寸ひかぬ男の魂。映右へかはせば右に立ち。映左へぬければ倉引戻す。映互に大汗ッしたら。倉おり。倉塙腰にすがつてぶら。映投げても踏んでも放さばこそ。さしもの手者も持餘し。二人一度にどつかり地響に。一息ほつとッあぐみし面色。映調扱々丈夫な魂な男。凡そ劍術一道には。誰こはい者なけれども。お手前が土性骨には伴龍も敵

はぬ。畢竟が元は此方から。仕懸けた入の鬮鷓返し。これで五分々々といふもの。其方の脇差の事も。此方の帯の詮議も。口外へ出さねば済む事。もう了簡して歸りやれさ。それともに聞き分けなけりや手並は今見る通り。此度は吉兵衛わが命がないぞよ。もうこれ限でサア。歸れ。と言捨て立上れば。倉調イヤく。天満の吉兵衛が出入しかけて。病犬の棒に逢うた様に。逆吠にしては立たぬわい。殊に相手は劍術師。ぶたれてすご。戻つたというて。どう此類が出されうぞい。もう何もかも外の出入は取置いて。こなたに打たれた此類を立てにやならぬ。猶金輪際付纏うて。此方を殺すか。おれが殺されるか二つ一つちや。命は始めから投出してあるわいの。サア。殺して下あれ。殺してもらをと。塙胸打叩き。ッ赦さん氣色はなかり

けり。吹調ム、成程尤もぢや。お手前を殺せば身も下手人。何の益に立たぬ事に互に命を果す道理。併し身どもに打たれて此儘に歸つては男が立つまい。何と命を捨てずとも。男の立つ仕様はないかい。

一札が貰ひたい。吹ヤ。貴イヤサ。町人出入は高が相手を誤らしてさへ戻れば。

何處へ出て男は立つ。命が惜しくば伴龍誤り證文書いて貰はうかい。吹ム、はて味いな臺詞になつたな。投げられて誤り證文取るとは。神代の昔から聞かぬ事ぢやが。それで腹の癒る事ならどうなりとせうわい。貴左様なうては叶ふまい。サアちやつノと書かれいと。腰の矢立も磨き込む。二十三夜の月明。吹心の曇墨黒に。誤り證文の如し。澤田伴龍と書認め。フン差出せば。貴懐より取出し合す證據の一通。詞本、墨色筆法紛ひもない同筆。御約束の通り備前長光の刀。

追付け指遣し申すべく候。一原九平太殿村岡圍右衛門より。吹ヤア其狀はと取付くを貴フシ一當あてて尻引棄げ。吹地又立ちかゝる伴龍が。貴腕首ちつとも働かせず。刀の盜賊圍右衛門。九平太方へ長光の刀賣つてくれいと頼みの狀。使に立てた鐵が嶽。死體の傍に落してあつた汝が手跡。此手と比べて見たいばかりに。投げられてやつたのを誠と思ふが汝が天命。西國江戸方の關取と揉んで來た此體。うぬらは小指にも足るものかい。お才殿の戀の意趣。禮三を殺して了ひたがる巧みの一々。引括つて屋敷へ連れ行き何も彼も白狀さす覺悟せいと。フン既付くれれば。

吹地破れかぶれと村岡が差込む腕合點と。擔いでどうぞ車投げ。朱鞘の一腰引つたくれれば。吹それ遣つてはとしがみ付く。貴肚腹をはたと眞の當。吹うんと倒るゝ其隙に。貴月に兎めく刃の光。纏に噂の彫物は。吹お才殿の咄に違はず。正しく是が備前長光へエ。吹悉しくと押戴き押戴く。吹所の大勢物音に。喧嘩喧嘩と立騒ぐ。吹貴ヤア棒の端ちつとも當るが最後爲にならぬ。千羽川吉兵衛が喧嘩の遠引見物せい。此奴は段々詮議のある奴。連れて往んで活を入れしめて存分言はせにやならぬ。天満まで付いて來て。遠引の譯見て置けと。吹腰にぼつ込む長光の。刀の詮議伴龍が。帯の前がは我が帯に。しつかと握る證據は隠れ。紛ひも大阪に。男の生粹關取の天満を。さしてぞ。三三

第六

吹太夫、同仲居衆く。中ものしやぎり打止んで今座付が始まつた。棧敷は西の二三の續き。東の五の下孫の出共に。五組のお客様方へさう申しや。火鉢は好いか。

煙草タバコ盆ハシと。和佐夫夫喚こゝろけば奥より仲居の

お品走り出で。阿ヲ、庄七殿やかましい。しやぎり打切つたも知つて居る。それでお出でと言ふけれど、此藤江は何故来ぬ。

あれ程約束して置くに不參があつてはならぬというて。最一度せきにと、フシの中に。和佐夫夫奥より出づる長崎客。刀提ひきげ。詞コリヤ〜仲居。顔見世見ると一人は見られぬ。呼びにやつた女郎は来るか。和佐サアお前の仰しやる新造様は。奥

に来て居さんす錦さんとこれにごさんす桂さん。跡の女郎様方は皆前からの知れた顔。錦さんは曲輪くるわからお出でたが。若し

西でのお馴染かえ。舞まいや西にも東にも近付はなけれども。身共が望む女郎はこれ迄動めした者ならず。和佐そんなら錦さんでもなし。舞エ、愚問々々と隙がある。

藝子はまだか。何故急に呼びにやらぬと地ぢばち〜はせる山出し炭おこり。フッ

散らせば。和佐詞御尤ももう〜。地爰へといふ間もなく。住里に名代の藝子の藤江。いきせきと来る上り口。和佐そりや藤江さん遅かつた。座敷はさん〜御機嫌直すお醫者はお前。マアお薬箱から上げませう。住アイ〜。今日は北の粟七へ行て。清野小枝せいのこえだ荻野。蛇へびの様な藝子様に引留められて酔うたわいな。舞フウ藤江といふは其許か。待ち兼ねた〜。

影繪の名人とある。サア〜見たい。三味線が聞きたい。尺八が所望。舞が見たい。住ヲ、せはしな。其様に一時に如何なるものちやいな。和佐ヲ、なんぼ藤江さんちやとて。そりやもう八人藝の座頭でなけりやいかぬ事。舞こな仲居どもは身どもが言ふ事一つも用ひぬ。拙者が所望する事なぞ邪魔する。住ア、これ叱りないな。其様にむしやくしやと立つた腹には。首頭紅葉をながすソレ。〜。〜。

それ。詞ちよつとお間致しましよ。住ア嬉し。藤江さんよう来ておくれた。住へエ桂さんの御挨拶痛み入ります。錦さんは如何ぢやえ。住アイこれもいんまに。れしいしちぢやわいな。住そんなら又

お客が。やしきしもしちぢやある。舞何の事ぢや。長崎でも聞かぬ唐音。こりや俺どもが事誦ことるのぢやな。いかう心に障るわい。何のさうではないわいな。とかく座敷で呼けば。餘所の可愛い色事咄。錦主も長である。舞此奴。三味線は弾かず。影繪は見せず。踊はせず。長であるとは身どもが鼻毛でも笑ふのか。其長とは何の事。住サア夫な。取長やれ

〜花のお江戸は兩國橋とや白い手拭横ナメスちやうである。舞長の因縁ワザかかくの通り。詞とはしやれ〜。住問ひましよ〜。住何なと問はしやれ。住お客は〜。はんこでござんす。住藝子は〜。

〜。〜。

〜。〜。

〜。〜。

〜。〜。

住ばく様く。産仲居はく。住かしこの色事。地よいこいく頼政は。鶴を射留めて御機嫌をなほす藤江が口車。住打連れフシ奥へぞ入りにける。和佐地行燈

居眠る時分より忍ぶ。禮三が戀の晝。錦が揚は足代屋の。潜戸半ばに窺ふ素振。フシ内を覗いて小手招き。産地目早く見付ける中屋のおさか。門口へ走り出で。調

ヲ、禮三様お前のお出では合點。錦さんも私が所へ今日出初。御用があるなら私が呼ば。マアお入りとフシ取持ぶり。和佐

調ヲ、其事でちよつと來た。今夜逢ねばならぬ事。爰の客は市原九平太であらうがの。あれには逢はれぬ。首尾を見て此文を。錦にそつと渡したもと。地背中を

びつしやり。産頼む者よりたのもしきは。フシさすが所に住めばなり。和佐地禮三は門を西東。忍ぶに目立つ大提燈。フシ北

よりと善く最戻より。住立つ子道ふ子に

譽められて否にはあらぬ岩川も。心いきせき足代屋の門で見合す顔と顔。調ヤア禮三様ぢやないか。和佐ヲ、次郎か。住お前を尋ねて漸う爰迄。聞きや錦さん來て

ぢやげな。和佐ア、其事は隠して居るに。住されば錦様を斯うせまい爲。私が心を盡したも水の泡。彼の人に勤めさせて

は。おれが顔が立ちませぬ。和佐サアく尤もぢやく。あれも長う勤めさすでもない。住其魂膽が猶氣遣ひ。是非今夜は連れて往ぬ。お前もごんせと地手を取れ

ば。和佐詞イヤ其客といふは。日外の一原九平太。おれが往てはむづかしい。どうぞ隠れて行きたいが。住それならわし

が仕様があると。地拵尺合ぬ長羽織。人目を包む黒縮緬。和佐頭巾も顔へすつぽりと。フシさながら借者と見えにける。住

サアく。地お出でと門口へ。すつと入れば。産座敷廻りの庄七。やれ珍しい關取

様。禮三様お出でぬので。南風も吹かぬがえ。住吹けばこそ出て來やんした。客衆一人連れて來た。何處ぞ座敷が明いてあるか。産アイ小座敷が明いて御座ります。

サアくこれへまあお上り。お供は何處へぢや。住イヤく供は芝居へやつた。産へエイや申しあなたは何方でござりますと。住地問はれて早速の出ぬ岩川。詞イ

ヤあれは江戸方の關取衆ぢや産エイ。わたしは法師様かと思うた。して彼方のお名は何と申します。住フウ貴様此關取知

らぬか。コリヤ氣疎い。あれが大關の里見山ぢやわいの。産エ、いつやら私が所のお客が彼方の手の形を持つてお出でな

されたが。ハテ見ると聞くちやな。住イヤく惣別相撲取は着細りがする。あれでも裸になつて。裨かゝしやると土俵

一ぱい。ア、見せたいなと地鼻動かさぬ相撲取。産とられてどつこい庄七が。詞

前髪のある源太様。我等は差詰め百姓役。辻法印と。里見山山場よう似たことぢやと打笑ひオチリ打連れ。座敷へ浮れ行く。組組フシ今宵初めて。錦木が。縁と義理とに引かされて。オチリ二度の勤めも男故。座敷はづして勝手口。覗ひ出づる案じ顔。
住住場跡から藤江が走り出で。同コレ錦さん如何ぢやいな。おさが殿の託物。渡す首尾がなかつた故。大事にかけて持つて居た。住住サア莞爾莞爾と笑ひ顔と。差出す文に組飛立つ思ひ。同コリヤまあ誰が持つて来たえ。住住やつぱり直に醜三様。住住門口覗いてこれはしたりと尋ねる中に。フシ小座敷より頭巾羽織で立出づれば。住住はつと恠り立寄つて。同ヤアお前は何時の間に。和和佐コレ〜藤江主。若し次郎が尋ねたら。此狀渡して先へ往んだと言つて下んせ。住住そりや禮三様取つて居る。組地わしも奥から尋ねてなら。住住罰そこ

らはわしが左平次で。くろめる中に。フシ奥よりも。咲咲開藤江々々。住住アイ〜。何處へ隠さう所も幸ひ。蒲團にくる〜衝立の。咲咲障子ぐわらちと市原九平太。同藤江。住住アイ。わりや其處に何して居る。住住イエ爰に顔見世行で。臺所に入氣がない故。張番してをります。ハテ實實氣な者ぢやなあ。錦めがをらぬ故。それを尋ねに爰へ来た。新町から南町まで附附はつて惚れぬく九平太。それと同じ様に附纏ふ虫がある。ても叶はぬ物は。金銀といふ物に抑へられ。虫めが。動きも這ひも得せぬ。氣味のよい事ぢやないかナア藤江。住住其金のある黄金虫黄金虫より。金が無うて泣く虫が。咲咲其處邊にをらうと地立寄るを。住住チテントテツン歌鐘に恨みがかす〜ござる。初夜の鐘を撞く時は。是生滅法是生滅法と擦くなり。後夜の鐘をつく時は。寂滅寂滅爲樂と。同コレ何ぢやぞいな。
咲咲イヤ此衝立の内へ。住住ア、滅相滅相な。コリヤわしが商賣の影繪の樂屋。見せる事はならぬぞえ。咲咲フウ衝立の影繪見たい。火を赫赫と燈して見せい。住住ハイ。お日にかけまする影繪の始まり。餘り近いと見えが悪い。必ず樂屋を覗くまいぞ。斯う火を燈して致しまするが梅が枝の無間の鐘。咲咲其歌おれが諷うてやろ。歌二十八六で文付けられて。二九の十八でつい其心。住住詞人の心も知らいで。面白さうに諷ひくつさる。咲咲おれが諷ふが氣にいらぬか。住住コレ間がぬけるわいな。ヲ、それよ。奥へ行くは錦様ぢやないか。咲咲どれ〜何處にと立上れば。住住火を吹消して同もう仕舞ひ。サアこれからわつさりと。お品殿おさが殿。呑直さうではあるまいか。和和彦よかる〜と地無理やりに。フシ押立て奥へ連れて行く。住住此間にちやつと小座敷へ。同開取様に相應な、

相手は手取の錦島。通砂子屏風の土俵入。化粧紙まで氣を付ける。行司役やら頭取やら。背中の元た古藝子。調子合うたる三味線の身に。引きかけるぞ。ッン頼もしき。吹詞仲居ども。錦は何處へ。此

九平太が目を抜いて。勘當受けたならすめを取込んで。うぬらが戀の中立か。此小座敷が物喫いと。地立たんとするを。落詞ア、申しお前は酔うてござるのか。

吹あの様なこと酒で酔ふ様な俺ぢやない。落サア壁高におつしやるので。なんで彼處に人が居よ。吹ヲ、居るか居ぬか此羽織と引つたり。地屏風ぐわりと引明くれば。住江戸。それにはあらで大前髪江戸張の銀座管。煙輪を吹き空嘯きくくつ／＼とッン吹出せば。吹地さしもの九平太悔り仰天。俄に目をすゑ千鳥足。調これは／＼鹿相千萬。酒を食へ過して思はざる不調法。御免なれ／＼。住いやもう

苦しうござりませぬ。吹イヤ／＼お氣に障つたら眞平／＼。住ハイ勘當も受けませず。元來人様に虫と言はれたこともなし。又虫であらう理窟もなし。マアそんな物ぢやござんせぬか。吹さうとも／＼

其許さへ其氣なら。拙者は安堵致したりと。地行かんとするを申し／＼。そりや貴方のお羽織でござりまするか。吹地はれて悔り持つたる羽織。詞ハア、／＼。へ、／＼。これは重々不調法。これは貴公のお羽織な。住私がどんざ羽織でござります。これは／＼。勿體ない其儘

／＼。吹イヤサこれを御縁にお近付。又來春はお出来しなざるゝであろ。其節は緩々と。地酔はぬ所を酔はさるゝ。科を酒に塗付けて。頬ッン押拭ひ入りにける。地錦はそつと走り出で。詞次郎様のお蔭にて。ひやいな所を通れたとッン悦べば。住詞コレ錦様。此方に逢ひたい

ばかりに。先刻よりから來て居やんす。お前を捕へて腹立つるではなけれど。如何につぶして下んすのぢやわしが爲には大切な禮三様。其お方に連添ふお前。其勤めをさすまい爲。おれに隠しておとはめ

が拵へた金。さうさしては此次郎が顔が立つまいと思つてか。お前方お二人を。首尾よう親御の内へ入れたら。眞に噓ぢやござんせぬ商賣冥利。投殺されても大事

ない。これ程に思ふのにお前も聞えぬ。禮三様も洞窓など。地大切にする眞實は。誠にッン關取一疋なり。地地錦は始終差俯向き。とかうの答もなかりしが。其お心が嬉しさに。禮三様と言合せ。親方様に譯いうて。今日からの此勤め。親方様ひして下さんな。此公界も暫しが中。住サア暫しの中が猶氣遣ひと。地やり合ふ中に奥よりも。落お品が走つて。詞申し次郎様。長崎のお客様。お前にちよつと

逢ひたいとて。住イヤコレ今夜はおれも
取込み。好い様に言うてたも。住イヤも
う爰へ見えますと。粗いふに錦は次郎
吉様。まだ話したい事がある。フッ後に
く〜と行く跡へ。地程なく出で来る田舎
客。詞これはく〜珍しいと地立出づる顔
見て悔り詞エ、お前は浄久様。詞ア、こ
れ〜。常住急な所でお目にかゝつた
故。見忘れも尤も變つた所で變つた形。
好い年して傾城買に來た親父。其女郎は
北野屋から出る新造。此方衆夫婦の志が
餘り忝さに。外の客には買はずまい。お
れが身請する心で。今夜來て様子を聞け
ば。勤めて居るは錦木。買ひたい女郎は
爰には居ず。此金も入らぬ物。勘當した
悴めに金やらう筈もなし。コレ次郎殿。
纏頭に貰うて下されぬか。住扱はそんな
ら此金で。詞イヤ〜おれは何にも知ら
ぬ田舎大盡。おれが事より彼奴等が。息

災で居る様に。朝夕祈る此數珠の力にも。
叶はぬものは國の掟。鐵が獄が殺された
も。團右衛門が業とはいへど。喧嘩の相
手はやつぱり悴。町人が人を殺しては。
遅いか早い風の前のお燵火。爰らにま
ひ〜してをつたら。淺ましい死をしを
らうと。夜の目も合はぬ因果な長生。
古來稀なる大盡客。詞どろぼが可愛けれ
ばこそ。厚かましいこの厚鬢。何事も次
郎吉殿。頭に免じて頼みますと立上れ
ば。住詞そんならもうお歸りなされます
るか。藤和地庭へ送りの祝の者。
詞次郎殿さらば何事も。言はぬ色なる
山吹色に。フッ誠殘して立歸る。和親の
情は身にしめど。人を殺せし罪科は。エ
遁れぬ。禮三が身の覺悟。森奥より仲居
が走り出で。詞わしや先刻にから出たう
ても話がしゆんで控へて居た。禮三様か
らお前へ此文。藤江様から頼まれた。住

どれ〜と開いて見るより。これはした
り何時の間に去なしたつた。エ、悦ばず
事があるに。イヤ些との間も斯うして居
られぬ。わしや北野屋へ行て来る間。錦
様に此様子戻つてから話しましよ。地
い行て來うと岩川は。悦び勇みフッ出で
て行く。地錦は文を見るよりも。あるに
もあられず走り出で。忍ぶ禮三を見付け
しより。エ、お前は聞えませぬ。何で私
を振捨てて。死ぬる覺悟の此書置と。和
言ふ口抑へる折こそあれ。住藤江は三味
線持ちながら。詞コレ錦さん。唯ぞ來る
なら知らして上げよと。地座敷紛らす三
味太鼓。粗詞ヲ、やかましうて一つも話
がならぬわいな。住地ヲツト心得すちか
ひ身。合す調子の糸調べ。詞アイ〜そ
れ錦さん呼ぶわいな。地ちやつと吹き消
す燈火の。紛れに脱ける禮三郎。外から
びつしやり暇乞。地はなれぬ思ひ胸の中。

闇の錦も諸共に脱けて出る氣を佳春込む
藤江。二階から見ると九平太が。住鬼の
目をぬく暗がりに潜戸ぐわらり。調ハイ
お尋ねなさるゝは二三軒西でござりま
す。ようお出なされました。

第七

地町の名もフシ鯉谷とて長堀を。少し南
へ入口も間口も狭き裏貸屋。かつて鶴屋
の禮三郎と名前はあれど外を家。留守は
憐の須賀市が見る目は無うて。喚ぐ鼻と
聞き耳。立つる門の口。葬禮戻りの上下
ため付け。我が家へ歸る禮三郎。ア、須
賀市様御苦勞く、ホお歸りなされました
か。きつう遅うござりましたな。されば
いな。他宗の葬禮といふ物は隙が入つて
悪いもの。外なれば行かぬけれど。家主
の葬禮に地まながら病氣も遣はれず。せ
う事なしに行きました。詞そりやさうと

留守の内に。誰も來はしませなんだか。
來た段では御座りませぬ。道頓堀の北野
屋の者ぢやというて。三四人の聲がして。
押入を明ける音。其處ら内をもんどり返
して住なれましたが。ありやア如何し
たこととござります。サア如何したこと
やら。あそこの奉公人が駈落したとて。

今朝から夫で丁度三度。わしがした事の
様に迷惑な事でごんす。此奉公人も何
處にはひつてけつかるやら。寧ろ爰へう
せあがると。これ程わしも案じぬと。
むしやくしや腹に上下も引きしやなぐる
やら。フシ引切るやら。見えぬ座頭が
イヤもう日暮れさうな。内に又稽古人が
待つて居られう。どれお暇申しましょ。
用があるなら何時なりとお呼びなされ
ませと。我が挨拶を機會にして。とぼ
く、フシ隣へ立歸る。地跡に禮三がつつ
くりと。詞今いふ通り尋ねに來るからは。

内は首尾よう出たものが。如何して今迄
來ぬ事と。案案じに暮れる胸の闇。ホフシ
いとど物憂き一つ鉢。無常は餘所か、チ、キ
こち／＼と。石と金との相性が。ナホス
あらば火のふる火燈箱。長付木に付け
て行燈に。灯す火形の明り窓。入口の戸
も。フシしめぐと。地又も案じる隣に

は。稽古の音が高々と。三下り歌浮名をな
がす。堀江川。流れに淀む捨小船。繋ぐぬ
縁は是非もなや。戀路の鬼が丹波屋の。
妻に通ひのかねごと。昨日は今日の飛
鳥川。ナホス、アノ歌は古手屋八郎兵衛。
友達の番具屋を戀の意趣で切つたと言ふ
が。又腹も立たうかい。蝶よ花よと言ふ
に思ふた色を盗まれては。これを思へば
錦木めも。昨夜内を出ながら今において
來ぬからは。外に心が。エ、左様いふ根
性とも知らず。親にも身にも代へたのが。
口惜しいわい無念なわい。三下り歌始の。

劔研ぎ立てて。我と身を裂く巖谷。ナキス
堀塚筋よりも半町も。フシ錦が尋ね夜の
道。フシ濱邊も果てし長堀の。小オトリ人目
を。包む短冠り。しめる門の戸打叩き。
○卒爾ながら禮三様の所は内方ちやござ
りませぬかと。尋ねる聲は錦木かと思
でんとせしが。誰じやく。そんな人は
此方ちやござせぬ。何處ぞ脇を尋ねまつ
しやれ。左様言はしやんすは禮三様ちや
ないかいな。コレわしちやく。わいな。
ちやつと明けて下さんせ。何ちや。わし
ちや。ヲ、どうで驚か。颯か。爪の長い
猿松め。猫め。畜生め。エ、おのれは。く。
く。切殺し。浮世の夢を。鮫鞘の鯉口
寛げ落し指し。早や初夜の鐘指折つて。
ナキス詞コレイナ。明けてくれんのかい
な。人が見付けりや悪いわいな。コレ禮三
様。何が腹が立つぞいな。口説どこ

ろちやござんすまい。昨夜の揚は足代屋
の。出られぬ内を漸々と藤江様の情に
て。出る事は出てもお前の内。爰とも知ら
ずうろく。と尋ねる内に夜は明ける。ど
うも仕様は中橋の知るべの方に今日の日
の。暮れるを逢瀬と待兼ねて。尋ね迷うて
来たものを。聞えぬわいな禮三様。思ふ
に違ふお詞。と言ふ間も疑ひ。フシぐわら
りと開き。ヲ、そんな事とは知らず。昨
夜約束した通り。二人一所に死ぬる覺悟
で。先へ戻つて待つて居れどわがみがお
ちやらす。内よりは二度三度家探しに來
る上は。軋落したに違ひはないが。今迄
爰へ來ぬからは。如何で外に心があつて。
おれをすつぽりやつたなと。腹が立つて
恨んで居たが。今のを聞いて。疑ひは晴
れたかえ。ヲ、其心底を聞く上は。サア
マア上りやく。と入口の。フシ戸をびつ
しやりと差向ひ。シテ今言やつた中心

にかゝるは。其知るべの方から若し知れ
はしまいかい。イエ。そりや氣遣ひ
して下さんすな。よし又そこから知れて
から。ハテ。明日まで待たぬわしが命。
お前の覺悟は如何ぞいなと。凭れかゝり
し。女郎花。涙は膝に置く露のいづれ。
はかなくフシ見えにけり。何のそれに
念押す事。岩川や千羽川股が。様々と心
を盡して下さるれど。昨夜わがみにいふ
通り。鐵が嶽を殺したる此禮三。すりや
どうで生きて居られぬ身の上。ガ兎角心
にかゝるは親父様の事ばかり。夫で吉兵
衛殿や。岩川へ頼みの書置。爰で死んで
は耻の上塗。大阪の町を離れて濱の寺ま
で行て死なう。用意がよくばサア。おち
やと手を取れば押留め。マア待つて下
さんせ。ム、待てといやるは心でも變つ
たか。何の心が變りませう。さら。左
様ではなければども。お前と夫婦になり

たいと思ふを勤めの樂みに。暮した甲斐もなき命。せめて今宵の半時を千年も添ひし心にて。ほんの男ぢや女房ぢやと。

飯炊く眞似や。水波む眞似世帯する眞似して死んだら。未來の迷ひはあるまいと。

さすが女のぐどくくといふも涙と紅くまの。錦あやなす フシ諸袖に。いと色添ふばかりなり。阿ヲ、尤もく。さう思やるなら。わしも手傳ふほどに。飯しかけて炊いたも。幸ひ今日は親父様の誕生日。ア、これ迄は不幸の仕續け。せめて女夫が煮炊にたきして。陰の膳なと据ゑるなら。それが此世のお暇乞と。涙隠して押入の。米取出しあてがへば。サハッ洗ふ。術うさへしらげの米。しをく下りるはしり元。とき洗したる白水は。顔に艶とる白粉の。解けて涙の フシかしぎ水。地ち夫は燃もす フシ釜の下。阿申し旦那さん。飯盛る物があるかいな。ヲ、あの人はせ

はしない。まだ出来ませぬ内から。ソレ押入に茶漬茶碗が一つある 地ちアイといふまゝ取出す。錦模様の染付も。阿ヲ、穢すな。コリヤマア何時洗うたまゝぢやいな。ほんにやもめといふ者はあつた白墮落なというて見る。心が、フシ眞ほんの女夫事。阿ソレ飯が焦こげ臭いぞえ。ヲツト 地ち合點燃え杭を消やす。此身も消ゆる身と。いへば錦も顔見合せ ヌエ又も涙にむせびしが。阿ア、我ながら愚痴な事。ソレあら

いげのさめぬ内。釜から直に盛つてたもと。地ち机の上に白紙を。フシ敷いて供へる陰の膳。阿御誕生日の御祝儀。目出度う上つて下さりませ。親父様母人様。これ迄一日お心休める事もなく。親に先立つ不孝者。其上碌な死も致しません。憎い奴と思召し。必ず泣いて下さりますな。此上に歎きをかけ。お身の痛みにもなら

うかと。それが悲しうござりますと。夫が

歎けば。フシ妻は猶。地ちわしも在所に一人の父さん年寄といひ目は見えす。去年祭に見えた時も。阿練物れんものに出るわたしが。髪切つたと聞いてさへ。あらぬ姿と泣かしやんした其時イエノ。無事で居りやこそ此様に。お健まな顔を見ますと。諫めた私が先立つて。又にかゝり死んだ事。地ち在所へ知れたら嗚や嘸。歎きの程が思はれて。悲しいわいのと。フシ伏ふ転ぶ心の。内ぞ遣る瀬なき。地ちせめて名残に一筆と。相の山観に向ひ磨る臺の。サハッこいとや誰も招かぬと。また盡き果てぬ親子の縁。オオス錦が親の手を引いてオクッそろく。北野屋七兵衛が。戸をほとほとと叩き。阿七兵衛でござりますすちよつと明けさしやつて下さりませと。地ちいふ聲聞いて二人は胸り。そりや親父ぢやどうせうぞ。まあこゝへなと入つて居やと。炬燵へ無理に押入の。蒲團打被せ禮

三郎。俄に作るフシ駭惚れ聲。誰ぢやもう寝ました。イヤ七兵衛でござります。御無心ながらちよつとお明けなされて下さりませと。地言ふに否とも不承々々。戸口開くれば。ハア、これはもうお休みなされましたか。ホ誰ぞと思へば七兵衛殿。ア、夜夜中見えたのは。定めて錦木がア、申し。今夜は揚でござります。コレ爰に居られますは。錦木が親父殿で。イヤ、何も驚きなされませぬ事は。此親父殿は目が見えませぬ。其見えぬ目をして。娘が顔が見たいというて日の暮に見えましたれど。錦木は揚で内には居ず。折悪し今夜は泊りが大勢あつて。此親父殿を寝さす所がござりませぬ。それで近頃御無心様ながら。今夜一夜さ何卒親父殿を、お前の内に寝さして貰ひましよと存じハイ。それで連れて参じましたと。聞聞いてはつと思へども。氣取られまい

と素知らぬ顔。ア、易い事。幾日なりとも。泊めて下さりますか。ヤレ、嬉しやサア、親仁殿上らしやれ。ヲツト危ない。とば、しまよい。ドレ、手を引いて進ぜう。ハイ、ア、親方様段々お慮外様でござります。ア、何方様ぢや存じませぬが赦さしやつてアイ今晚はおやかましようござりましよと。怖々するに禮三郎。イヤ、其様に氣を張らずとゆるりとしてござりませ。ハイいやコレ親仁殿。あなたはすつとお心安い程に。ゆるりと思うてハイ、ア、いかいお世話さまでござりますな。ナン、いや申し然らば私はモ歸りましよ。御面倒ながらお頼み申上げます。長居したらどうやら。重井筒の炬燵の段が。イヤ禮三様ちよつと、あれ迄お目に掛りませうと。同伴ひ表、フ立出づる。アお前に悦ばせませぬ事がある。叔錦が立金は

受取りましてござります。ム、そりやア何處から。イヤ岩川殿から受取つて。済んである事は知らず。昨夜から見えぬ錦。それでこれ。此年季證文をお前に渡さうと思つて持つて参りました。立金が済んだからは。どうせうと。お前方の心の儘ぢや程にナア。死ななくても済む事なら。というて止めても。鐵の網の中へ入れても。死神といふものが憑いては人間に力にや及ばぬ。私も北野屋七兵衛といはれては。島の内顔の賣れた者の命を取留める事なら。縦へ立金取らいでも。率公人に涙もかけぬ恩にも着せぬが。あの親仁殿爰へ連れて來たのばかりは恩にさせねば。アレ目の見えぬ人が。うるつかしやるのを見ては。いかな氣の強い死神でも。思ひとまらにやなるまい。ナ申し。必ず、禮三様。これいほうづかりに。イヤもうお暇申します。コレ、

親仁殿。去にますぞや。ホ親方様お歸りなされませうか、そんなら申し。夜の内でも娘が歸りましたら。憚りながらお知らせなされて。一時なと早う顔が見たうござります。ヲ、そりや尤もぢや。戻り次第知らせませう。イヤ禮三様。早うお休みなされませと。情を殘す情の商賣。切りはなれよき親方に別れて。禮三も内に入る。其間も待たず蒲團押退け。飛んで出づるを禮三が止め。逢うては悪いと仕形と身振。蒲團を口に押當て。フシ泣聲かくす心遣ひ。此方は何の氣も付かず。申し旦那様。エ、何ぞ進ぜませうか。イヤモウ何時でござりませう。さればもう四つ半にもなりませうか。ヲ遠道歩いて。定めてお草臥。ドレ寢所をして進ませう。イエ、申し。御體ない構はしやつて下さりますな。遠い道を探りもうて参じます。娘に逢は

うと思ふ楽しみ。嬉しうて。寢たてなかく。目も合ふこつちやござりませぬ。イヤ申しもう何時でござりませうな。今夜はむしやうに夜が長い。ア、早く夜が明けてほしい。ちやつと逢ひたい。今宵限りの命とも。知らず明けるを待兼ねる。親の心ぞ。哀れなる。錦は正體なき内も書殘したる硯箱。筆取上ぐれば。相の山いと猶。涙にむせぶ泣聲を。隠す禮三が咳拂ひ。ナントママ親仁様。袖の振合せも他生の縁とやらで。斯うした若い者のお年寄を泊めますれば。私はもう親と思つて居ります程に。お前も子の所へ來たと思つて。心易うなされ下さりませ。これはママ勿體ない事おしやまして下さります。お前様方に其様に結構にははれる親仁めぢやございませぬ。在所者なり目は見えず。したが今

も娘が陸。ア聞かしゃつて下さりませ。十年ばかり後迄は長柄村でもかうもした百姓でござりましたが。ふつと日を煩ひまして。身上有限り打込んで。とう／＼首になつて。モ途方にくれて居りました所を。今北野屋にをります姉が。新町へ勤奉公に參つてくれました。其給銀を庄屋殿へ預け。月々の利足を取つて。夫で私が樂々と喰はれる様になりまして。ほんにあの様な孝行な娘は世界中にはあるまいと。思ひ出す度には旦那様涙がこぼれて嬉しうござります。夫で一日なりと早う勤めを引かしたいと存じましても。目は見えず鏡儲けの術は知らず。思ひ付けて去年から。按摩取を致します。コリヤ私が身の冥加。是も娘が顔の汚れる事ぢやと思つて。あれには隠してをります。ヤほんにちつと。肩揉んで上げました。ハイ。そりや忝うござります。そ

んなりや御苦勞ながら。肩よりは此手を
コレナ。此手をお前のお手で。ちつと握つ
て下さりませと。錦木が手を持添へて。
出せば此方も差寄つて。ア、お手が痛
みますか。お安い事。揉んで上げませう
とも。ドレ〜お手を。テモ和らかな尋
常な。丁度女の様なお手ぢや程にの。イ
ヤナニ親仁様何とマア人といふものは何
時知れず。老少不定と申しますれば。か
ういふ私が明日死のやら知れぬ命。若し
死んだらこれが此世の暇乞にもなりませ
う程に。手先をちつと。ア、旦那様にん
げな事はしやりますわいの。其様にお
つしやりますと。心細うてなるこつちや
ござりませぬ。地體此間は夢見が悪うて
案じてをります上。大阪の茶白山で心中
があつた。イヤ太左衛門橋では切つたの
彼處では突いたのと。聞く度々に胸がひ
やく〜。もし姉めではないか知らぬと。

それで案じて参りましたが。親方様の仕
なと仰しやるので。ア、嬉しやと落付い
てはをりますれど。ソレ今おつしやる老
少不定。ひよつと姉が煩うて。私より先
へ死んだら。此親は如何せうと思ひます
れば。俄に悲しうなつて来て。御赦され
て下さりませと。涙を拭ふ塵紙の薄き
親子の契りかと。物いひださと悲しさに。
錦は胸も張裂く思ひ。蒲團に喰ひ付き
ッシしがみ付き前後。涙に伏沈む心ぞ。
思ひやられたり。早や丑三つを告げの鐘
はつと禮三が氣もそどろ。晝置一つに
ッシ手ばしかく。詞申し親仁様。私は晝
約束がござります故。更けましたれど。
ちよつと近所まで往て参じます程に。も
し留守の中。京飛脚が來ましたら。此状
渡して下さりませと。いひ中錦を引立
つれど。更に正體立つ足も。なく〜禮
三に誘はれ。出づる戸口は死出の門。こ

れが親子の別れの涙。思へば胸に保ち兼
ねわつとばかりに泣く聲の。血筋も肝に
徹へてや。詞今のは體に姉が聲。コリヤ
娘よ。何處に居るぞいやい。親方の詞と
いひ。先刻にからの様子と言ひ。何で親
に隠れるのぢや。姉よ〜と。立上
れど方角もなき目なし鳥。壁にばつたり
行燈はぐわらり。二人も探り大阪の。町
は生死の塊筋涙。ながらに。三果迎り行く

第八 道行關路の町續

二より夢にだに。見し夢さへも死出の夢。
覺めては何時かこの婆婆へ。歸らぬ道も
ナホスッシ夜風や。吹く風寒く。身にぞし
む。往來まばらの軒のつま。エエ結びと
めたる下がへの。主よ女房と只一夜。そ
れが未來の。フシ晴れの小袖。綾も錦がう
ら若き。長世二世と契りし禮三郎今宵限
りの命ぞと書残したる藻塩草。ほんに誓

紙の數よりもオクリ手を取り交し行先は。あの世この世の。塚筋。フシオクリあゆめどへ道も。抄らぬ。其サハリ跡には親の枯れ残る。老木の老の逆様に。順慶町も空ごとや。わしとお前が憂き事の。あだな契を。米屋町本町筋の軒深く。思ひ初めたる中なれば煙ともせず諸共に。埋まばなどか。安土町男も同じ二世三世。生

れかはりて又爰へ。親の便を備後町。永き未來を互町。かくなり果つる我々はいつの因果を。身にうけてともに憂き目にナホスン淡路町。悔むは愚痴と平野町。

本ッとは思へども棄つる身をとがめてほゆる犬の聲。道修町筋通行けば。早や眞夜半の月代の。フシ空恐しく行き悩む。しばしは爰に伏見町。高麗橋の果までも。ともにぞ連れんさりながら。所詮此身は人殺し。一所に死ねれば親々へ不孝の罪も恐し。地ぞなたは生きて亡き跡を。

頼むとばかり盛り聲。錦は涙の顔を上げ。生きるとも死ぬるとも二人一所と言ひかはし。今の辛さを。あの世にて。閻

の咄の樂しみと。思うて居るに胸怒な。大事のく父様に換へていとしいお前の事。忘れうとすれど猶更に思ひ。切るにも切られぬは。如何した結ぶの。神さんが結ばしやんした縁ぢややら。いふに言はれぬ鴛鴦の。番離れぬ中ぢやものお前に別れてそもやそも。何と存へ居られうぞ共に殺して下さんせと。縋り付いたる恨泣き。道理々々と撫でさする。顔は涙の横しぶき。フシ戀故に降る露時雨。此處や彼處に。立ちとまる浮世小路の縁薄く。水のあはれや大川を越えて。急ぐは

後の世の。縁を祈りて寺町や今ぞ誠の。女夫池人目つみみのやうくくとフシ濱の寺にぞ着きにける。

第九

詞サア錦覺悟はよいかと。抜放し既に最期と見えける折から。團右衛門九平太に繩をかけて千羽川。岩川諸共駈け來る跡より。津田兩助淨久お才を伴ひ來り。まだ生きて居てくれたかと親の悦び兩助も。團右衛門が白狀にて彼奴等が悪事明白。鐵が嶽は九平太と馴合うて。殿のお金を盗んだ盜賊。禮三に科なき御政道と。地聞いて岩川千羽川。次郎吉吉兵衛世話甲斐あつて重疊。何かに付けて兩助様のおかけく。猶此上は御本妻はお才様。お妻は錦木様。成程々々先づ囚人引立てよと。兩助が采配にて家に羽を伸す鶴屋の禮三。池田の關取。天満の關取。千兩。千兩二載其名を。雌波に上げにけり

明和四年
亥八月四日

作者連名

近松好松半
三田文松
竹田小文松
竹田小文松
八民平出
竹本三郎兵衛